

雑纂, 抄録, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38495

○植物分析ニ於ケル 一般浸出法

藥學科第三年生 大岩小一郎

茲ニ植物成分浸出法ヲ紹介スルニ當リ成可ク詳細ニ其分
析法ヲモ記述センコト素ヨリ余ノ欲スル處ナリト雖現今分
析學上ニ於テ分明セル植物成分ハ有機鹽基及酸ノミニテ
モ三百六十有餘種ニ亘リ加フルニ無機ノ酸及鹽基アリテ
其數又夥シキニ達ス然ルニ是レガ分離性及定量法ヲ詳
述センハ中々ノ難事ニ屬セリ故ニ此處ニハ唯要ヲ摘ンデ
其浸出法ノミヲ記載スルコトナシタレト時ニハ分析法ノ
範圍ニ侵入スルコト無キニシモアラズ諸子ノ之ヲ諒セラレ
ンコト乞フ

▲一般ノ注意

植物成分浸出ニ際シテハ多

ク可檢品ハ乾燥セルモノヲ準備ス可キモノニシテ普通三
十度ヲ超過セザル温ニ於テ脫水セシメ便宜上速ニ粉碎シ
以テ其用ニ供スルモノナリ然レト揮發油ニ富メルモノ又
ハ甚シク揮發性アル物質ヲ含有スル檢体ハ勿論乾燥ス可
キニアラズ且糖類ヲ檢定セントスル際其物質ガ多量ノ糖
分ヲ含有スルキハ乾燥セズシテ却テ新鮮ナルモノニ就テ
檢スルナ好シトス而シテ乾燥度百度乃至百十度ニ至ル時
ハ植物成分中易變性物質ハ既ニ化學的變化ヲ惹起スルコ
アルヲ以テ水分檢定等ノ必要アルキハ可檢植物ノ一部ヲ
採リ其用ニ供セザル可ラズ浸出法施行ニ際シ最緊要ナル
ハ檢体ヲシテ可及的均等ニ混和シ且總テヨク粉末トナシ
テ使用スルノ一件ナリトス
而シテ植物分析ニ於テ多ク失敗ヲ招クコトアルハ其物質ヲ
充分粉碎セザルニ基因スルモノナラン例ヘバ依的兒或ハ
石油依的兒ヲ以テ油類ヲ檢定スル際屢其「プロセント」量
ニ相違ヲ來スコトアルハ是レ其溶解藥ヲシテ細胞間ニ浸入
セシメズ只其表面ニ存スル成分ノミ溶解シ來ルガ故ナリ

然シテ分析ス可キ植物ヲシテ細微ノ粉末トナスハ困難ナルコトニ屬スト雖決シテ其勞ヲ避ク可キニアラザルナリ種子或ハ如斯甚堅固ナル物質ヲ粉末トナサントスルキハ其前暫時百度乃至百十度ニ乾燥センコトヲ要ス今例ヘバ珈琲ノ種子ノ如キハ之レニ硝子末又ハ精製白砂ノ一定量ヲ加ヘ研磨シテ粉碎シ以テ其細末ヲ製スルコトヲ得ルモノナリ

新鮮ナルモノニ就テ檢ス可キ彼ノ粘液物質ハ大抵以上ノ方法ニ依テ正確ニ施行シ得ベシ而シテ多脂肪性物質ハ石油依的兒ヲ以テ浸出シタル後再ビ乾燥シ更ニ研碎シ以テ浸出ノ用ニ供セザル可ラズ

▲石油依的兒ニテ浸出サルベキ物質

揮發油 Ätherische Oele 脂肪油 Fette Oele

蠟 Wachse 等

植物成分浸出法ニ於テ石油依的兒ハ最初ノ浸出液トシテ使用セラル是レ石油依的兒ハ甚ダ容易ク揮散スルノ性ヲ有スルノミナラズ揮發油及脂肪油ヲ比較的ヨク溶解シ依

的兒使用ニ際シ此内ニ溶解シ來ル處ノ多クノ樹脂及之レニ類似セル物質ヲ攝取セザルガ故ナリ是レヲ以テ吾人ハ揮發油及脂肪油ヲ檢測スルニ際シ石油依的兒ヲ使用セバ多クノ場合依的兒ヲ最初ニ使用スルヨリモ一層精密ニ作用セシムルコトヲ得ルモノナリ猶他ノ一利益トシテ可溶性蛋白質ニ富メル物質ヲ取扱フ際ニ於テ此石油依的兒ハ蛋白質ノ凝結ヲ來サズ且可溶性「アルブミン」ヲ定量スルニ豫メ脂肪ヲ脱取セル物質ヨリ浸出シタル石油依的兒浸出液ハ直ニ其定量ニ使用シ得ルモノナリ此處ニ應用スル石油依的兒ハ反覆劃温蒸溜ニ依テ精製シ四十五度ニ於テ沸騰スル物質ヲ含有セザランコトヲ要ス而シテ石油依的兒ノ蒸溜ハ豚脂上ニ於テ施行シ不純ノ有臭物ヲ豚脂中ニ攝取セシムルヲ好シトス

石油依的兒ヲ以テ浸出サルベキ植物ハ既ニ記セル如ク細微ノ粉末ナラザル可ラズ而シテ其浸出ニ際シテハ石油依的兒ノ精密ナル一定量ヲ要スルモノニシテ少クトモ可檢品ノ五乃至拾倍量ヲ使用スルカ又ハ可檢品一瓦ニ付十c.c.

ヲ使用セバ尙良好ナラン而シテ浸出ニ要スル用器ハ狹キ硝子圓筒ニシテ平滑ナル硝子栓ヲ有スルモノヲ用ユ若シ用器ニ劃線ヲ存スルキハ溶解藥ノ量ヲ加減スルヲ得ル便アリ

而シテ可檢品ハ八日間浸漬シ其間毎日二三度ヨク振盪シ以テ浸出ヲ遂行ス此際蒸散ニ依テ消失スル石油依的兒ハ時々補足スルノ注意ヲ拂ハザル可ラズ

▲依的兒ニ可溶性成分

樹脂 Harze 及類似物質 Verwandler Stoff

石油依的兒中ニ轉溶シタル成分ヲ可及的廣ク檢索シタル後該殘渣ヲ室溫ニテ乾燥シ七日乃至八日間純粹ナル依的兒ヲ以テ浸漬ス而シテ用器ハ石油依的兒浸出ノ際使用セシモノヲ再ビ應用スルモ支間ナキモノナリ是レ全器ヲヨク洗滌シ再ビ乾燥スルキハ附着物ヲシテ濾紙上ニ來ラシムルノ患ナカルベシ

茲ニ使用スル依的兒ハ粉碎セル格魯兒加爾叟謨ト共ニ振盪シ數日間密閉シテ放置シ然ル後重湯煎上ニ於テ蒸溜シ

テ精製ス。吾人ガ植物分析ヲ施行スルニ際シ一定不變ノ好結果ヲ得ント欲セバ水分及酒精ヲ含有セザル純粹ナル依的兒ヲ使用ス可キモノニシテ是レ又浸出法ノ一要件タルナリ普通販賣上ノ依的兒ハ多量ノ鞣酸ヲ含有スル植物ヨリ其鞣酸ヲ時トシテハ多量ニ時ニハ少量ニ溶解シ來ルヲアレハ精製セル依的兒ハ大抵然ラザルモノトス、サレド販賣上ノ依的兒ニ依テ植物中ノ鞣酸全量ヲ除去セントスルハ全ク不可能ナリ故ニ完全ニ除去スルノ能力アル酒精中ニ攝取セシムベキモノトス

依的兒浸出ニ於テヨク其目的ヲ達センガ爲ニハ高度ノ溫ヲ防遏セザル可ラズ凡テ植物分析ノ進行ニ際シ一般ニ注意ス可キハ多クノ場合其溶解藥ハ室溫ニ於テ作用セシムニアリ然レハ各成分ヲ特定定量セントスルキハ其檢体ノ一部分ヲ加温シテ浸出スルハ敢テ妨ゲナカラン依的兒ヲシテ八日間作用セシメタル後溶解成分ノ總量ヲ確定スルノ必要アルキハ其浸出液ヲ蒸發シテ定量ス可シ然シテ使用セラル、依的兒量ハ通常植物(可檢品)一瓦毎

第十卷 雜纂 第五十號

ニ五乃至十c.c.ヲ使用スベキモノニシテ浸漬ハヨク密閉セ
ル器中ニ於テ施行ス可シ而シテ消失スル少量ノ依的兒ヲ
バ補足シツ、浸出シ然ル後清澄トナリタル液或ハ濾過シ
タル液ヲ蒸發シテ依的兒ヲ除去シ以テ各成分檢索ノ資ト
ナス而シテ總量ヲ得ルニハ百度乃至百拾度ノ温ニ於テ恒
量トナル迄乾燥シ後秤量スベシ該浸出液蒸發殘渣中ニハ
石油依的兒ノ浸出シテ既ニ除去サルベキ脂肪ノ混在セザ
ルヤ否ヤヲ注意セザル可ラズ脂肪ハ各檢査ニ於テ常ニ妨
害トナルヲ以テ若シ脂肪ノ存在スルキハ更ニ石油依的兒
ノ精製ニ依テ除去スベキナリ然レモ蓖麻子油ハ或ル關係
ニ於テノミ石油依的兒中ニ溶解シ來ルモノナルヲ忘ル
可ラズ

▲無水亞爾簡保兒中ニ溶解成分

樹脂 Harze 鞣酸 Gerbsäuren 苦味質 Bitterstoff

亞爾加魯乙度 Alkaloide 葡萄糖 Glycoosen

石油依的兒及依的兒ヲ以テ浸出シ盡シタル殘渣ハ室温ニ
テ乾燥シ今ヤ原可檢体一瓦ニ付十c.c.ノ無水亞爾簡保兒ヲ

注加シテ少クトモ五日乃至七日間浸漬ス而シテ揮散スル
少量ノ亞爾簡保兒ヲ補足シツ、更ニヨク混和ス可シ此際
酒精ノ蒸散ハ可及的防止スルノ策ニ出デザル可ラズ浸出
物ノ總量ヲ確定セント欲セバ濾液中ヨリ一定量(約十c.c.)
ヲ採リ既秤白金皿中ニ於テ蒸發シ百十度ニ乾燥シ恒量ヲ
得ルニ至リテ秤量ス可シ濾紙上ノ殘渣ハ無水亞爾簡保兒
ヲ以テ洗滌シ洗液ハ濾液ト合シテ濃厚トナス之レヲ行フ
ニハ沸騰「コルフ」ヲ用ヒ「コルフ」内ノ氣壓ヲ減ジツ、蒸
溜スルヲ最モ好シトス

然シテ濃厚液ハ之レヲ硝子皿中ニ入レ室温ニテ硫酸乾燥
器内ニ於テ乾燥セシム乾燥殘渣ヲ水ニテ取扱ヒ其浸出液
ヲ鞣酸及葡萄糖ノ檢索ニ使用スルヲ得ルモノナリ水ニ不
溶解ナル部分ハ二三度安母尼亞含有ノ水(一二五〇)ニテ
取扱ヒ其安母尼亞浸出液ニ稍過剩ノ醋酸ヲ添加シテ蒸發
セバ褐色ノ物質トナル是レ「フロバフチ」ト稱スル物質
ニシテ此者ハ鞣酸ノ分解生成物ニ基因スルモノナラン又
安母尼亞含有ノ水ニ不溶解ナル部分ハ再ビ硫酸乾燥器内

ニテ乾燥シ依的兒ニ溶解シタル樹脂ノ場合ト同一ナル方
法ニテ檢索シ得ルモノトス(多分ハ脂肪ヨリ成ル)

今依的兒中ニ不溶解ニシテ亞爾箇保兒中ニ溶解スル亞爾
加魯乙度ニ付キ考察ヲ下サバ安母尼亞含有ノ水ニテ取扱
ヒタル後硫酸含有ノ水ニテ處置シ以テ亞爾加魯乙度ノ搜
索ニ進行ス可キモノトス

▲水ニ可溶性成分

粘液 Schleim 酸類 Säuren 葡萄糖 Glycosen 蔗
糖 Saccharosen 蛋白質 Eiweißsubstanzen 等

亞爾箇保兒ニ不溶解ナル部分ハ四十度ヲ超エザル温ニ再
ビ乾燥シ然ル後原可檢体一瓦ニ就キ少クトモ十c.c.ノ水ヲ
加ヘ之レヲ浸出器ニ取り室温ニテ四十八時間時々攪拌シ
ツ、浸漬ス可シ充分浸出シタル後濾過ス此際出來得ル限
リ液ノ蒸發ヲ防遏スルニアリ濾紙上ノ殘渣ハ更ニ水ニテ
浸漬シテ洗滌シ其洗液ハ最初ノ液ト合セズシテ直ニ蛋白
質及酸ノ檢索ヲ試ム可シ

最初此處ニ濾過セル浸液中ニハ水ニ可溶性物質即チ「ハ

(雜纂)

マトキシシ「没食子酸」「カテヒン」、焦性阿仙藥、「ザリチ
ール」酸、安息香酸、「ザリチン」、他ノ配糖体及亞爾加魯乙
度等ヲ含有スルモノナリ之等ノ總量ヲ檢定セント欲セバ
濾液十c.c.ヲ既秤白金皿ニ取り水浴上ニテ乾燥シ百度ニ熱
シ恒量ヲ得ルニ至リテ秤量ス可シ然シテ灰化後ノ重量ヲ
殘渣ノ總量ヨリ減却スレバ無機物及有機物ノ概算ヲ得ル
ナラン進ンデ灰分定性ヲ施行セバ炭酸、硫酸、磷酸、格
魯兒、加里、麻樞涅叟謨、石灰等ニ富メルヤ否ヤヲモ判
定スルコト得ベシ植物浸出液ガ多量ノ糖分ヲ含有スルハ
ハ其殘渣ハ多ク硝子狀ヲ呈ス之レヲ除去スルニハ少量ノ
水ヲ以テ容易ク此内ニ攝取セシムルニアリ

▲稀薄那篤倫滷液ニ溶解成分

「メタアラビン」酸 Metarabinsäure 蛋白質

Eiweißsubstanzen 「フロバノチ」 Phlobaphene 等

水ニテ浸出セル際不溶解物トシテ殘留セル者ハ濕潤セシ
メ再ビ那篤倫含有ノ水ト共ニ混和ス此稀薄那篤倫滷液ハ
千分ノ一乃至千分ノ二ノ水酸化那篤倫謨ノ精確量ヲ溶存

克

第十卷 雜纂 第五十號

スルモノナリ

而シテ原可檢末一瓦ニ付該液十ccヲ以テスレバ其結果良
好ナラン浸漬ハ二十四時間ヲ要シ其間時々攪拌スルニア
リ茲ニ濾液ノ一定量(二十c.c.乃至五十c.c.)ヲ取り之レニ醋
酸ヲ飽和セシメ且九十「プロセント」ノ酒精三倍量ヲ混和
シ而シテ二十四時間冷處ニ置ク時ハ沈澱ヲ生ズ此沈澱中
ニハ粘液質(Pectinsubstanz)及蛋白質化合物ヲ共存スル
モノナリ此粘液質ハ Scheibler 氏ノ「メタアラビン」酸ニ
基因セルモノナリ

初メ浸出液ヲ蒸發シテ得タル殘渣ハ之レニ水ヲ作用セシ
ムレバ不溶解ナル褐色ノ塊ヲ生ズルコトアリ是レ即「フロ
バフキ」(Phlobaphene)ナリ

然シテ定量ヲ施行セント欲セバ醋酸ヲ添加シテ生ジタル
沈澱ヲ既秤濾紙ニテ濾過シ七十五「プロセント」ノ酒精ニ
テ洗滌シ乾燥シテ秤量ス可シ此沈澱ヲ燃化シテ其灰分ヲ
計算スルコトヲ得ベシ

▲稀薄鹽酸中ニ溶解成分

「アミロン」(Amylon) 「パラフィン」(Parabin) 稼酸
加爾叟謨等

稀薄那篤倫液ニ不溶解殘留物ハ水ニテ洗滌シタル後一
「プロセント」ノ鹽酸ヲ含有スル水ヲ以テ混和ス可シ然シ
テ此處ニ注意ス可キハ澱粉ノ存否如何ニアリ是レ試驗ノ
進行上大ニ關係ナ有スルモノナレバナリ澱粉ハ勿論顯微
鏡的檢査上其形狀ヲ以テ確知シ得ベシト雖既ニ沃度水ヲ
以テ青色ニ變ズルヲ以テ容易ク知ルコトヲ得可シ又澱粉ト
共ニ「パラフィン」様物質ノ檢体中ニ存在スルヤ否ヤヲモ試
驗スルノ必要アリ吾人ガ前二者ヲ存セザル單一ナル場合
ニ相遇セバ稀鹽酸ニテノ處置ハ稼酸加爾叟謨浸出ノ目的
ニ探ルコトヲ得ン稼酸加爾叟謨ノ定量法ヲ記スレバ鹽酸
ヲ以テ三十度ノ温ニテ廿四時間温浸シ後濾過シ濾液ノ二
十五c.c.乃至五十c.c.ヲ安母尼亞ニテ中和スルカ或ハ鹽酸ヲ
格魯兒那篤倫謨ニ變ゼシムルニ足ルベキ量ノ醋酸那篤倫
謨ヲ加フ可シ醋酸ニ不溶解ナル稼酸加爾叟謨ハ器底ニ拆
出スルヲ以テ全ク上清ノ透明トナリタル後其上清液ヲ除

去シ其沈澱ハ純良ナル濾紙上ニ致シ洗滌シタル後乾燥ス
而シテ此稼酸鹽ハ弱熾灼熱ニ依テ炭酸鹽ニ變ズルカ又ハ
強熾シテ苛性加里ニ變ジ以テ稼酸鹽ノ量ヲ計算スルヲ得

* * * * *

孤 録

○結核性腹膜炎ニ於ケル食鹽

減少食餌療法ニ就テ

München. med. Wochenschr. No.1. Januar. 1908.

Alwens氏ハ浮腫性腎臟病者ニ食鹽減少食餌 Salzarmkost
ヲ與ヘテ浮腫ノ著シク減退スル關係ニ基キ該療法ヲ結核
性腹膜炎(腹水アルモノ)ノ五例ニ應用シ好果ヲ得其理ヲ
利尿作用ニヨリテ説明セリ曰ク血液ハ一定量ノ食鹽ヲ含
有スルモノニシテ若シ体内ニ攝取セラル、食鹽量節減セ
ラル、キハ血液ハ組織内ヨリ食鹽ヲ取リテ其欠ヲ補フモ

ノナリ此際若シ体内ニ腹水ノ形トシテ食鹽豐富ノ所アラ
バ所要食鹽ハ其所ヨリ血中ニ移行シ此際腹水中ノ水分モ
同時ニ血中ニ入り爲メニ利尿ノ作用催進セラル可シ而シ
テ該療法ノ効果ノ持續ニ付テハ未ダ充分ニ決定スルヲ得
ズト雖速ニ且ツ充分ナル効果アルハ疑ヲ容レザル所ニシ
テ五―七週ニシテ腹水ハ充分ニ除去セラレタリト、氏ノ
實驗セル五例中二例ハ腹水ノ瀋溜甚ダシカリシ爲メ僅時
日前一回穿刺セシモ爾後速ニ瀋溜シ來リシモノニテ他ノ
三例モ又能ク移動スル多量ノ腹水ヲ有セルモノナリ
氏ハ曰ク腹壁外部ヨリ行フ爾余ノ諸療法ニテ効果ヲ収ム
ルニ數月ノ長日月ヲ要シ且ツ利尿劑ノ奏効確實ヲ保ス能
ハザル比較的頑固ノ本症ニ對シ該食鹽減少食餌療法ハ結
核性腹水吸収ノ目的ヲ以テ試用ス可キ價值アルモノトシ
テ推奨スルニ足ルト

○般暈ノ原因

Kenneth, F. Lund. Münch. med. Wochenschr.
No. 2. 1908.

著者ハ船暈ノ原因ヲ聽器殊ニ半規管ガ船ノ動搖ニヨリ亢奮シ爲ニ嘔吐中樞ニ作用スルニ歸セリ而シテ鼈噬ハ爲メニ決シテ本症ヲ起ストナシト

○酸ノ「アドレナリン」ノ作用

ニ及ボス影響ニ就テ

Archiv für experiment. Path. u. Pharm.,

57. Bd. 5 u. 6 Heft 1907,

「アドレナリン」ハ「アルカリ」性溶液中ニテハ速ニ分解セラル、モノナルヲ以テ Kretschmer 氏ハ酸ノ注加 Säure-zufuhr ニヨリ有機体内ニ於テ「アドレナリン」ノ分解ヲ防ギ得ルヤ否ヤニ就テ検査セシニ同時ニ酸ヲ加フルニ依テ「アドレナリン」注射ノ貽後持續 Nachdauer ハ著シク延長シ得ルヲ見タリト云フ

○眼反應及ビ皮膚反應ヲ同時

ニ應用セシ動物結核ノ診斷

Académie des Sciences (Sitz. v. 25 Nov. 1907)

Lignères 氏ノ實驗ニヨレバ此ノ Combinierte Reak. ハ多クノ場合ニ於テ Klassische Tuberculin-injection ノ代用タルコトヲ得、L 氏ハ二〇〇例ノ結核牛ニ試ミシガ「ツベルクリン」注射反應ノ陽性ナリシ例ノ全部ハ眼、皮膚反應又陽性ニシテ注射反應ガ陰性又ハ疑ハシカリシ結核牛ニ於テモ眼、皮膚反應陽性ナリキ但此兩反應ハ健康牛ニハ陰性ナリシ而シテ放線狀菌病ニハ Mousu 氏ノ實驗ノ如ク注射反應、眼、皮膚反應共ニ陽性ノ成績ヲ示セリ

○小兒期ニ於ケルピルケー氏

「ツベルクリン」皮膚接種法

Munch. med. Wochenschr. No. 1. Jan. 1908,

Prof. E. Feer 氏ハピルケー氏ノ「ツベルクリン」皮膚接種法ヲ三百四十四例ノ小兒ニ試ミ次ノ成績ヲ得タリ臨床
上結核ト診斷セラレシモノ二十五例中二十四例ハ反應陽性、結核ノ疑アル二十八例中十四例即 50% ハ陽性、結核ノ疑ナキ二百九十一例中二十九例即 9% ハ陽性ニシテ

右三百四十四例ノ外別ニ百十二例ノ哺乳兒(甚ダ種々ノ疾病者)中只三例ノミ陽性ナリキ

同氏ハヒルクエー氏ノ説ヲ引用シテ曰ク臨床上確實ニ結核ト診斷セラレシ小兒ノ全部ハ該反應陽性ナルモ只例外トシテ粟粒結核及ヒ腦膜炎性ノ結核ニシテ死前約十日以内ノモノ并ニ高度ノ惡液質ニ陥レル結核病者ニハ該反應顯ハレズト

尙同氏ハ次ノ如ク論ゼリ

小兒ニ於テ該反應陽性ナルハ該兒ノ結核タルヲ證スルモ反應陰性ノモノハ必ズシモ非結核者トハ云ヒ難シ

該反應ノ強度ハ疾病ノ蔓延程度ト何等ノ關係ナシ

接種成績ハ多クハ一回ノ視診ニテ反應如何ヲ判斷シ得ルモ最モヨキハ更ニ二十四時間后再診スルニアリ

接種反應ハ時トシテ一定特異ノ變化ヲ呈セザルコトアリ余ハ屢々接種丘疹又ハ其周圍ニ小帽針頭大ノ帶莫赤色ノ硬キ小丘疹ヲ見シコアリ

一度皮膚接種ヲ行ヘル後更ニ第二回ノ接種ヲ試ミ再度第

一回同様ノ反應ヲ呈セシコアリ

大人又ハ年長兒ニ於テハ非結核者モ又時トシテ陽性反應ヲ呈スルコトアルヲ以テ該反應ノ陰性ハ診斷上大ナル意義ヲ有スルモ陽性成績ハ左程大ナル價値ナシ

又 Fear 氏ハ皮膚反應ヲ以テカルメツト氏ノ結膜反應ニ勝ルトシ結膜反應ハ腺病兒ニ於テハ「フリクテン」又ハ他ノ種々ノ不快ナル刺戟症狀ヲ惹起スルコトアルヲ以テ腺病者ニハ結膜反應ヲ避ク可シト云ヘリ

○日本人ノ生理的胃液

鹽酸量ニ就テ

Archiv für Verdauungs-Kr. Bd. XIII Heft 5

大阪湯川氏ハ百七十三例ニ就テ試驗シ(先年長與博士ノ説ノ如ク)日本人ハ歐人ヨリモ酸度低キヲ見タリ即平均總鹽酸量〇、一二三四遊離鹽酸量〇、一一六八總酸量〇、一五三三ナリト又同氏ニヨレバ日本ニテハ女子ハ男子ヨリモ胃酸過多症少ナシト云フ

(以上 齋藤房治抄)

漫 録

手帳の端

雨 橋

一 國府津の宿

夜は更けぬ。

國府津の驛には絶間なく汽笛響きて、蒸汽吐く音枕を
撼かせり、風なけれど夜氣冷かにして星斗爛子、渚の波
を緩く寄せたる。

早發にて在さねばいざ、案内申さむとて、誘はれし松
蔭の二層樓、閑寂の味を獨り領して、松韻濤聲と和する
所、部屋の狭からぬも、拙なき飾り施さぬも、松の隙よ
り漁火の見ゆるも、滄浪の遊子の身には嬉しくて、茅ヶ
崎大磯、逗子葉山、こゝら公達の領園に夢を結ぶの思ひ
懸けなさよ、夏こそは無ぞ、此處に起き居のあて人の、袖
のゆかりに聞かむと云へば、何とも云はで打ちも笑ひぬ。
中間の襖を外しければ廣さは身に餘りたり、十燭の光
落つる人なき家居は、心のどかに鉢ゆたかにして、眼を
さそう波の音よ、過ぎし日の行路難をよく越へ來しと思

ひ返すにも、高嶺に喘ぎ登る姿、急坂を危ぶみ降る俣、
狼や出でむ笹原の、風に驚き急ぐ脚、利根の水上橋落ち
ては、淺瀬の波を便りにて顛ひ戦さし種々の、今こゝに
臥す吾れとは世を隔てし感の起りて冷たき汗の今出づる
を。

日數重なり降る雨に大凡は歸り給ひしが、見給へ、か
の樹立深きに燈火の見ゆるは、病みたまへる若き婿君
にかしづきます夫人が岐阜提灯にて待り、夜も靜かにな
るまゝに妙なる感さの絲の調べは松の響きに寂びて、客
愁を爲し給ふべくや、哀れはいかに不如歸の御身に限ら
むなど聞ゆるに、われは情の子、ろは尊さの灯なりけり、
御法の道は知り待べらねど今生の恩愛なかくに血ある
身には嬉しきや、後生善處も現世安穩には若かざるべし、
魂は只だ魂に頼りて慰められも活きもせむ、さればと吾
を省みるに子然として沈み行く地の搏動に頭垂れて襟吹
く風のろるる寒かり。

かゝる愁思は天上の星に托して夢結ば、や、明日は鉄
路破壊せりてふ山北、小山の嶮もあり、遅れなば一大事
ろと叫びて、褥に就きしが、枕に近く刻む秒のいつにか消
えし、旅の疲れに哀樂の、胸を傷むることもなかりき。

一 ウォーターシート

博覽會もろろく下火になつて、上野の森陰懐かしき頃、両毛の山奥へわけ入る途すがらに帝都の人となつた、さて其晩からゆかりの雨。

某館と筆太の番傘に、赤い鼻緒の高足駄、浴衣に袴と云ふ打装は、さしずめ長井兵助居合抜きの子分であつて、自分ながら余り感心はしなかつた、正門前の掲示を讀むと晴れ次第國母陛下の御臨場とあつて一般の觀覽は見合せて居る、で早速不忍池畔の賣店めぐりと出掛けた、申さずとも、ちやんと錢なき君と僕の、彼れもいゝな、此れもいゝなど見て歩くだけは應揚に、博覽會のくぢ引きで運よく一等の百両も當つたら賣店の半分も買潰してやらうなどと、蜻蛉の鉢巻で向ふの見へぬ事を考へながら、臺灣の芭蕉店の前に大きな蝙蝠が何か食つて居るのを茫然見て居ると、鼻に泌み入る脂肪の香、あの西班牙料理と書いてある池畔亭の焜爐の上の燒鍋の中の肉片から出てくるものらしい。

やがてバチ仕掛けのやうに歩み出したが、あて途もないので池の端なる舊友の畫家を訪ねた、處が今日は澁谷の方へ森の寫生に出かけたと云ふ、この忙しい世の中に態々東京まで出てきて森の寫生をして居るとは呑氣な人もあるものだど感心しながら落膽して、最う御歸りの時分だからと云ふのを、戀しくは尋ねきてみよ上野なると

一首の辞世を殘して立ち出でた。

それから古本屋を漁り再び引返してライオン館だの特許館だのどろハ館を巡視してもう歸らうと自分は、ウオターシネートの前に立つた

長旒彩旗は雨にぬれて肅然として居たのが僅かの時間を命と樂隊が田舎者を呼び集めて居る、その招集に應じた自分は無意識でインクマインのトップに登り大阪の蛙が江戸を見物する様に伸び上つて見廻すと高き低き屋根の波、赤き白き家屋の壁、煙突は不斷の煙を吐いて、市中を横ざる氣車の響にわらが在所とは、下けい違いと目を落せば老若男女貴賤都鄙、夏衣の袖かるく、烏鷺く賣店の前を恨めしさうに眺めて行く。

小舟はする／＼と傾斜を上つてくる、吾輩とさうして一人の小僧君とは之に乗る、座を占めると樂隊の合圖宜しくあつて、舟の氣車は九轉直下、凄しい音響で不忍池の水を穿ち池底を貫いて三千丈、奈落のドン底で碎けよと許り湖心目がけて眞倒様!

と云ふと大層に聞へるが、實にアツと云ふ間もなく水に凜然と入り舟の、裾に乱る、波模様、少からず鯰や鰻を驚かしたが、小僧君早速備へたきける摺オッ取つて、件のバッテリーを漕ぎ戻すと、鎖を舳先へ結び附けの、再びがら／＼と舟の天上、首尾よく相つとめますれば、先づは

一段の勇士氣取りで、明智左馬允琵琶湖乗り切り何のそ
 のと反り身になれば賞め手もなく、代を拂つて、飄然表
 へ出る奴を、二三間遣り過して置いて後からトンと肩を
 打つ者がある、振り返ると、之なん美術家先生の、新装
 の服に微笑を堪たへ「オイ君の成功を祝す」

と云はれた時はこゝ許赤面な致した哩。
 人には秘めよ、之は去りし歳の稚氣であつた。

三 山 北 驛

瀛車は山北驛に停りぬ。

一時間を経て更に現場の假停車場に發車すと云ふ。

山北驛は戦場の如くなりき。

直ちに車を出て構外の旅舎に入りて少時待つ間を過さ
 むとするに、こゝは東上の客を以て満たされ入口には辨
 當の折を山のやうに積みて、男女七八人大釜の飯を詰め
 つゝありき、尙ほ勝手許には朦々と立ち昇る湯氣の裡に
 忙はしくたち働らく者、椽に腰かけて蓮根を切る者、焼
 豆腐を數へ居る者、菰包みの鮎魚を解く者、運搬車に積
 む者、紛然雜然として餓鬼の御齋おごさいとは斯かる有様ならん、
 訪なへど誰れ一人答ふるものなく、幾百の旅客は已むな
 く蓆の上に坐し枕木を拂ふて行く末心許なげに彼方此方
 を打ち見てありき。

予は國府津の早發はやさつがに朝食を卵にて凌ぎたり、山路に餓
 へなば一步も進み兼ねるべしと洋靴の底に忍ばせ置きた
 る辨當取り出し菓子屋の店前に陣どりて認むるに瘦せた
 る豹の去りもやらぬ。

あゝ颯々たる東海の鐵路三百哩、相迎へ相送る大小の
 驛の中に這個天災地變は山北小山をして驚く可き名を擧
 げしめたり、常ならば函嶺の舊難を語り合ひて窓外に一
 瞥を與ふるに過ぎざるべき地、或は相模の海づたい心樂
 しかりし詠めの今は荒原廢川相連り墜道また墜道、寔に
 旅客が沒趣味を歎ずる地なりしが、今や山北小山間一哩
 一鎖、鐵道大破、當分復舊の見込なしとの文字は日本の
 あらゆる新紙に大書せられて、慘狀混雜とは如何に事々
 しく日々の紙面を飾りしか。

瀛笛忙しく鳴るに予は蒼徨車中に入る容車は五臺を越
 へず三輛の無蓋貨車は後に續きたり、いざ發車と云ふ前
 の騒がしきを見ずや、その貨車には木材、煉瓦、を半ば
 積みて、空所には荷物運搬婦を乗す、これ附近の農夫が
 妻女にして上り下りの旅客が手荷物を停車場間に運ぶも
 の、胸に一片の徽章を附けて、櫓を負ひたる、何處にも
 見る山の女の様なり。

三人寄れば姦しきに、此はまた耳を聳せん喧囂の、吾
 れ勝ちに乘らむとす、利の前には身の危きを省みず誰れ

か他の損害を慮らん哉、見よ若きは先んじ力強きは勝ち數分にして貨車は三ツの人山となりぬ、かくても尙乘らんと奔めき合ひ、車上なるは手を延して親しきを引き上げ、母なるは娘の名を呼び、車に縋る手の數は千手觀音も既足にて工夫の大喝も何等の効なく驛員の叱咤も元目に終りし時に、流笛は耳を聳いて列車は搖き出でたり旅客はたの／＼窓より首を出して物珍らしき景況を見ざるは無し、車の動くと共に歡呼の聲は後なる貨車の上より高き調にて起れば、殘れるも同じ歡呼に双手を舉げて、暫しが程は聞へたりしが。

四 元旦の日記

降る雪に越路も見へずなつたのを、どうして歳が越へたかと歌の心の今日である。
そして其の日も暮れ近い。

四十一年第一の夜は古洋燈に新らしい光を放つ、見廻すと輪飾りが床の柱に懸つて居る、昨夜である、雪に外套の袖を拂つて、さる八百屋の店前の蜜柑の上に不遇を歎して居たのを、請じて神齊き奉つた、よし一個二錢であるとしても、新玉の年には大立物である。

この輪飾りを見て故郷を思ひ出さずに居られう事か、門松店、繩店には眞黒な人の山、商買の高聲に、カン

テラの油煙に、人ぬきれのする中を根松さげて梅さげて、日本銀行の前まで來ると初めて人心地が附く記念碑の燈冠が闇空に寶石の如く燦めく、あ、今年初めて此の世話がなかつたと、却つて淋しく思はれる。

と、壁にかけた半身像が今宵はわけて活々して、肩をこつて打ち煙る金髪に、そよと搖ぎも見ゆる氣のして、雲か霞の白布一片、豊かに艶なる眞玉の肌を惜しげ無く寒風に曝したが、少しもめげす馥郁として、春暖かき煩の色は、この蕭條たる部屋の裡を、さながら樂園と化すべう匂ふて居た。

隙漏る風に更くる夜の思ひがした、時計を見ると七時である。

埋火を掘つて手を翳すと、硝子戸にさら／＼さら、雪踏みわけて訪なひの、衣摺れかと懐かしみ、耳を傾むくる佗しさは、更に新年の夜と取り難い。

時あつて末期の呼吸と、か弱い一陣の風が見舞ふ外には物の響の絶へてせぬが―耳と澄ますといと微かに、地下を通ずる暗流か、夢路の里のいさ／＼川、有るかなきかの音を立て、松風と惑はるゝは、犀川の深雪の底に流るゝのである。

かゝる折り子供の時に讀んだ「異郷の新年」と云ふ文が思ひ懸けなく浮ぶ、然しその折りに異郷の觀念が無か

つたから痛切に身に泌まなかつたが、思ひきや十餘年の今日になつて遠い過去の消え果てゝ居た追懐が新らしい力を以て烈しく精神を動かさんとは、人の身はやがて吾が身に、明日はまた誰が身の上に移るであらうか。

新年の市街の様と帽をとつた、襟巻をとつた、闇の夜に雪の面は白かつたけれど、家毎の戸は賑はしきかるた遊びから一條の光をも漏らすまじく、宵でさへかくも静まり返つて居る。

傘が重くなつて、足駄の轉びさうになつたから角の土藏で雪を拂つた後は追風に帆をあぐる格で七八間歩んだか、吾を留めた物ころあれ。

杉垣、竹垣、板圍、片側町の長き夜に、繽紛として降る雪の、竹の葉に音するさへ、一人なれば、胸に應へ、況して冷たき人の世の異郷の空に、雲低く闇黒く、一点の光だに無き逢魔が時に、予を留めたは、雪佛雪女、何れは雪の精なるものと想像はせらるゝが。

唯だ見る、大なる窓の光の、眩ゆきまでに明障子を照して、笑ひ崩るゝ賑かさに、少女の影のゆらめいて、十餘も算すべき小兒の宴は、あまり故郷の吾が家に似たりと、この身既にその席の人らしい。

誰れのすさびか、弓擦る音が初まると、年の初めの唱歌が之に連れて一齊に唱ひ出された、父も和するや、母

も和するや、降る雪も舞ふて落つるや、この夜この時去りがてに、胸を抱いて遡つたのを、君よ哀み給へである。

五 日 光 の 雨

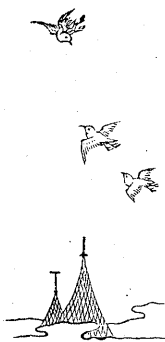
大谷川だいやがわの川音は物凄かりき。

新御神橋を左に見、爪尖り上りの道を急ぐに參拜の人もなし、杉樹立の晝尙ほ暗く、石段の石燈籠の寒色に、何の響もせねば、餘りの淋しさに歸らむかとも思ひたり。

俄に雨は降りきぬ、驚けば鐘聲二點、漢固として耳許に破る輪王寺門跡の時鐘ならし。

大粒おほなごの雨の白玉、玉鉾の杉にかゝりて、ほろ／＼と散る、神寂かみささびの聖園尊としな、鐘やみし後は天地愈靜かにして雨も亦降り増さる。

予は樹の間に見ゆる朱塗りの殿堂さして、一散に雨を衝きて走りぬ。



通信

○加藤寛君書信の一節

山崎教授宛……………

拜呈

其の後は甚だ御無沙汰仕り申譯無之平に御海容下され度候。

毎々繪葉書御投與下され、何よりも樂みに致し居り候、何か面白き事柄發見致候は、御報知申し上げんと兼々心掛け居り候へ共、何珍らしき事も無之、わきて先生等の如き一度御留學等なされし御方には、尙更至極の事に御座候。

着獨四日許り後、偶然同校出身の松久君同地に御出でてに相成り、同金澤出身の事とて話が合ひ過ぎ申時々「インスチテート」の仕事を怠り、下宿屋の二階に *Quatschen* 致すこと度々に有之候、茲に小生の不思議に感するの未だ一面識なき同校出身の人より留學の費用及び語學の程度を御問合せ相成りし方々二三人有之候が御留學既に御歸朝の先生のあるにも拘はらず不便極る手紙を以て御質問相成る御心の程察し兼ね申候。

此の二ヶ月程以前伯林の *Der Tag* を始め他の二三の新聞紙は大坂朝日とか(確とは知り申さず)の「ドクトル」試験の受験方法とかの題下に記載せし記事につき痛く神經を惱ましたると見へ獨逸の學位に對する *Paleidigung* とか論じ始め次で田舎新聞に至るまで同一論調の燒直しを以て充分日本人を攻撃いたし候が其の結果にや少くも *プロイセン* の大學は慥かに學位試験の程度を高め候へば爲に頭痛鉢巻の人も有之べくと存候

ロストック の如きは此れ以來試験科目十一科目に増加いたし候、十一科目も有之候ては數の上にて一考の價値これあり候。

當地に於て尤も言葉の達者なる先生の知已は昨今試験結了いたす可く候が今二三日后ならでは相分り申さず候へ共、小生の「インスチテート」の *Director* なる且 *Decan* は曰く本春來試験法を少々變更せし結果君が *Landsmann* の試験は其の *Prognose ganz ernst* なりと云ひ了りて苦笑いたし居候。之により當地の學位試験がいかに危険物なるかを御推察下され度候、惟ふに今更君子は危きに近づかずを氣取り中止或は遁逃せんも是又無上の意氣地なしと存じ候、只今小生は化學を嚙り居申候傍ら他の或る「クリニック」を立觀致し居り候來學期は傍ら内職を始め顯微鏡と首引いたす都合に御座候

松久君は中々勉強家で沈着家で甚だ有望の人、母校のため祝すべき事にこそ、其の他金澤出身は中々大勢力かと存じ候即ちグライフスワールトに二人、ミシユンヘンに一人、ライプチツヒに一人ベルンに一人、現在總計五人に御座候。

かねて當地は御承知の事と存候が町は至つて詰らぬ町に御座候へ共幸に海濱に在りシユトラールズンドへは瀛車にて三十分、リウゲン島に程近く誠に散策には非難なく候、而して大學も三百年來のものにて設備も完全いたし居るとかに候、當地は「ランドアー」教授の死したる地にて「ランドアー」の經營せし「インスチット」は小生の日に遊び場に御座候。

當地は北方獨逸の事とて、例の Platdenstein の本場にて、耳面白く響き候……………

私は時々歸心矢の如く起り甚だ困り入り候へ共愚母全快以來大した事も無之候。

併し小生は一向同化不致「ビール」は未だ全く無味に御座候、只々萬事日本に限ると思ふの外何にも御座なく候但し松久君は既に「ビール」は味ひ掬すべしといふまでに進化いたし候、先達も酔氣で小生の宿に來り乙な端唄を唸られしは返すくも忘れがたく誠に浦山敷様に御座候欄筆に際し謹で國家の爲め先生の御健康を祈上候、何

れ遠からず又の御便り可申上候……………

○敷波重治郎氏通信

(二月廿八日萊府涉印、西比利亞經由)
三月十九日敦賀滑印、八田氏宛

(前署) 僭而貴兄にはドシ／＼通信せよとの仰に候得共無學無識の小生の事とて御通信申すべき事無之、普通の事は既に達筆なる界外仙史(隱士の誤)の報導あり「何ぞ愚筆を弄する必要あらんや」でシヨウ、又「アルバイト」も僅か二年斗來て大シタ仕事も出来るものでありませぬ故只日本へ歸りて着手する材料を集め自分の腦中に收めて歸朝の途次太平洋上などで吹飛ばされぬ様注意し仙臺醫專校研究室の机上に其材料を陳べて着々其を應用し研究の結果若し良好なれば十全會雜誌上に自分より其時掲載を頼む事に致しマシヨウ、夫も何年の後か確かと御約束は出来ませんが先づ／＼大器晚成サチーハ／＼、乍憚小川先生へ宜しく、尙十全會誌は其都度面白く樂しく拜見仕候云々

○松原三郎氏通信 (八田智証氏宛)

こは私信なり、長文の私信あり、猥に公にすべきものにあらずらんも之を只私するに忍びざるもの多き、今鉄腸子が虎叱を甘んじて之を掲ぐる事とせり

書中高安博士在職廿年祝賀會に就き紀念號を刊せん事を熟望慈通せらるゝ處切實なるものあり、是れ我等の大に賛向する處あるも、此議に就ては昨年十月廿四日廿年祝賀會第一回發起人會に於て小原講師より發せられ、終に「博士の徳を傷くるが如きものを發行するに至るが如きあらば其任重く其責輕からずと云ふに歸着し」否決せられたるものあり、幸に本號誌上博士が小照と紀念すべき有益なる論文數篇あり、子たるものまた遺憾おかるべきを信す

人格の尊ぶべく重んずべきは人たる者の常に心すべき處、而して子遠く之を提唱し來る、我等は學に思ふる子が一面向上的精神を以て徳を養ひ道を修むるの篤きに愈々益々欽仰の聲を放たざるべからざるなり、我等の不徳不才ある、人格問題に就ては多少言はんご欲する念なきにあらざるも、既に箝口斷腕、今之を云爲するを耻つるあり

(四月十八日 八田生識)

一月二十九日發の端信只今落手拜讀仕候、其後は愈御健康に復せられたる事と存候如何に候哉、病餘の身に於て餘りの過勞及勉學は殊更に御注意せらるべく候、就中頃日は氣候も寒きこと故誰彼となく御互に自愛が專一と存候下平先生、敷波氏及橋本氏等歐洲に在りて御壯健に御勉學の由吾校の爲のみならず邦家と斯學の爲め賀すべきことにて益健康ならん事を祈申候

諸角氏は更に令闈を迎へられたる由是亦祝賀すべき吉報に御座候、人生は常に安慰なかるべからず、若し慰安なくんば或は自ら之を求め或は他より之を求めざるべからず、若し人あり予は毫も慰安なくして可なりと云はゞ是

も一の慰安を得たるなり、六ヶ敷ことはサテ措き人各慰安を求めざるべからず、若し自己一身上に慰安が必要ならずとも自分の両親兄弟姉妹を慰め親戚を安め朋友を安心せしむるに缺くべからざるものなり

島田氏が此度京都醫科大學の鈴木先生の教室に入りて解剖學の研究に従事せらるゝ事となりたる由、其健氣の壯大なる其理想の深遠なる生等後輩たる者の深夜人定まりたる頃沈思默考して自ら省み自ら勵み自ら戒めざるべからざる一大教訓に非ずや、奥深き人生の行路に多少の蹉跎あるは當然の事なり複雑せる社會の岐路に徘徊して行路難を歎せざらんと欲するも豈得べけんや、此蹉跎多き又岐路繁き人生の行路に停立して泰然自若たるを得るものは果して何によるや他なし吾人が自ら頼む所の慰安あればなり、何が故に慰安ありや趣味あればなり、如何にして趣味ありや人各目的あればなり、目的なくんば趣味なく趣味なくして慰安なし、此脆弱なる肉體に時々之恙あるは敢て怪むに足らず、只微恙の故を以て自暴自棄せんとするは吾人の常とする所なるのみならず亦世人の俱に追ふ所なり、然れども余は常に奮闘を以て趣味とし慰安とす、是れ獨り自己の爲のみならず余は吾が母を慰めざるべからず余が師恩に酬いざるべからず余が友を安めざるべからざればなり、不肖余は素よりにして大した事

は到着出来難き事を知れども一旦生れたからには健康でアローガ恙がアローガ兎に角御互に社會人類の爲に少しでも出来る丈の事を盡さざれば御互の義務濟まずと思へば中々自暴自棄する事出来なくなりドーシテモ働かねばならぬ事と存候、夫故御互に自愛自重して出来る丈の事を盡したきものと存候、コンナ事に就てはマダ／＼申上度き事あり、又小生の眞情を披瀝して貴下の教を乞ひたきこと澤山あれども本日は郵便／＼切日なるに付單簡に切り上げ次便にて申上げることに致候

御消息によれば藤岡勝治氏にも頃來微恙ありと余は實に夢に夢見る心地せられ候、國から來る手紙にて毎月誰か友人の新たに恙ありと報ぜられざる事なし、同氏は在校の日俊才を以て目せられたるに天此人に微恙を授く亦殘酷にあらずや、昔時吾が理想とせる豪傑不識菴謙信をして恍惚たらしめたる能州の景願くは前途多望の同氏をして一日も早く回癒して社會の奮闘場裡に勝利者たらしめん事を祈居候

小生が末席を汚し居りし十年前とは異り頃日は貴兄等の御盡力によりて十全會雜誌も大に進歩整頓仕候、殊に十全會講話部は中々御盛んな様子にて其記載を讀むからに氣持も振ふ位に御座候、又運動も甚だ盛になり庭球、弓術、柔道、劍道等夫々の豪傑方も御揃の様子中々有望に

存候、人格上に元氣を附ける事は何でも相當に勧める必要ありと存候

余が卒業後今に至るまで碌々として十年を費し未だ大に得る所なく自ら耻づる所甚だ多し、而して此十年間に最深く感じたる事は人格問題に御座候、區々たる暗記より來れる片々たる智識終に夫れ何するものぞ、藤村操が誰々の哲學によりて何等の「オーソリティー」を得る能はずして華嚴の瀧壺の泡と消えたるも特に不思議の事はあらず、小生は在學時代には大に智識を得ん事に孜孜せり、今にして其愚なりし事を悟り候、人間の如何は人格の如何にありて智識の如何にあらず、君以て如何に存ぜられ候哉、高潔なる人格是れ人生の美に非ずや玲瓏たる社會是れ國家の美に非ずや、去元旦には或日本人の下宿に行きて新年を迎へ初めて熊谷直實及平敦盛の薩摩琵琶、小敦盛なるものを聽きて泣かされ申候、實に高潔なる熊谷の人格余をして一層高き理想と深き感興とを抱かしめ候

斯の如きは乾燥なる西洋歴史になき日本の花に御座候、義を盡し情を盡して亦何物をか要せん是れ男子の本懐にして人性の至美なるものと存候、是を以て學校にても柔道や劍道を盛にして其技術の巧拙を練らんよりも高潔なる武士道を養ひ、試合の勝負を決せんよりも奥床しき人物を作らん事に注意し、學業を妨

げざる限り出來得るだけ武士道の養成と人格の練磨に心懸ける様御互に注意し度きものと存候

此度高安先生の在職二十年祝賀會可有之候由是亦一大美擧と存候、米國にては師弟の關係日本程に温かならず小生常に以て遺憾とせる所、今此吉報を得て大に愉快を感じ申候、此度の祝賀會は可成盛大なるを要すると共に可成高尚にして且つ永遠に傳はるべきものものとせざるべからず、紀念品を贈呈して先生が多年薰陶せられたる恩に報するは勿論可なり其他出來るだけの事をして先生の高恩に報ひ先生の効蹟を明にすべき様に御盡力ありたし、ソコデ小生の思附たる事は祝賀會を盛にし紀念品を贈呈し尙殘金あらば眼科に關係ある書籍を求めて十全會の圖書館に寄附し、本年四月頃發行する十全會雜誌は特に高安先生在職廿年祝賀號とするか、或は普通の雜誌の外に特に祝賀號を號外に發刊して先生の傳、先生の逸話、先生の所感、先生の友人門弟の所感等を印刷して殘さば一層興味あるべし、若し一步を進めて祝賀誌を全然學問的のものとなし先生が是迄發表せられたる論文を揃へ之に眼科教室の人々の近頃の報告のみあらず他教室の人即ち凡て先生に教を受けたる人々の新しき報告或は古くとも近頃のものを集めて特に祝賀誌 *Festschrift* を發刊せば一層の美擧と存候、純粹の學問的論文を集める事は時日

を要し時既に晚しとならば先生の論文、肖像の外に先生及其他の人々の所懷雜感、昔話等を一揃にして十全會雜誌の號外祝賀誌となすことは左迄困難の事に非ずと存候、御意見如何に候哉、可成萬難を廢して御實行せられべきものに候、此機を逸しては再びするの時なかるべし

* * * * *

小生は社會生活の表面と裏面との統計を集めるのが大に好きだと云ふ變な癖があるので渡米後新聞や雜誌に注意して人生や社會問題に關係ある統計が見附かることを切抜て新聞切抜帳に貼附する事よして居ります、又統計のみならず苟も米國殊に紐育の社會組織を説明する日々の重なる雜報即ち日本の新聞に於ける三面記事を集め例者紐育の慈善事業には如何なる種類ありて如何に經營せられつゝあるや或は當地人は如何なる方面に向て自己の娛樂及運動等を求めつゝありや、或は當地人は如何様の機會にて結婚し如何なる原因にて離婚するや、或は米國は御轉婆婦人の本場と云ふが如何なる工合に婦人が威張りつゝありや、或は紐育は如何にして兒童及成人並に他國人を教育しつゝありや等を實例にて証明が出來る様にと思ひて毎日の新聞を切抜きて貼附し今や千頁以上に達し申候、大抵輸入りの雜報を撰び記事を讀ますとも繪丈けにて一寸早分りの出來るものを撰び居候故後日幻燈にす

る事も出来得可き事と存候、一寸厄介な癖なれども「タテ喰ふ虫も好き々々から」と云ふ事も有之、生來の性質故之も致方無之候、此中より單簡なる統計を二三書き抜きて御覽に入れ可申候、勿論時々切抜きたるもの故更に順序立たず或は前後矛盾し或は同一のものが重複する等の事もあるならんと存候得共、人各得たる樂を御互に分けるのも一興と存じ其一端を申上候

▲今年紐育市に於て土地及家屋新築の爲め毎日一百万圓の金が投資せられつゝあり

▲紐育芝居は大抵歐洲の文學者が製作した脚本を演じて居ると云ふ人もあるけれども只今の所其脚本の六割五分は米國にて製作せられたものなりと云ふ

▲紐育市から歐洲に向ふて輸出する荷物に年中一時間毎に千三百三十噸と云ふ割合なりと云ふ

▲紐育港税關の収入は毎日平均百八十万圓

▲紐育市内には毎週墜落爆發及衝突等の類によりて死するもの平均十四人

▲一ヶ年に紐育市へ輸入せらるゝ寶石類は八百万圓

▲紐育市内に毎夜用ゆる燈火は二億七千三万燭光なり

▲紐育市の市街清潔の爲に費す本年の豫算は千四百万圓
余なり

▲時は金と云ふのは米國人の口癖で時間を貴び之が利用

に苦心する事は東洋人に夢にも想はざる所なり或人が紐育市民の一年に收入する金高から割合して曰く紐育の晝夜の一分時は約六万圓に相當する由なり夫故若し紐育が貨物、電車等の組織上一日に三十分間を儉約する事が出来れば一日に百八十万圓丈餘計に生産する事が出来ると云ふ工合にて紐育は夫が爲「トンネル」及橋の爲め十億万圓を費しつゝありペンシルバニア鐵道會社は二億四千万圓を投して河底「トンネル」を作り「セントラル」鐵道會社は一億四千万圓を以て停車場を改築しつゝあり此等は皆時間を儉約せんが爲なり

▲紐育市の小學校の毎日の學童出席數は頃日六十三万五千人にして昨年よりも三万五千人の増加なり

▲紐育市内にては毎年下女下男に支拂ふ金高が一億四千万圓にして米國全体の陸軍維持費に相當し此下女下男は五万人に達し一分時二百六十四圓の割合なりと云ふ

▲紐育のみならず一体に米國の市に酒屋の多き事は驚くべき程にして紐育にては男女及小兒三百七十七人に對し酒屋が一軒ありと云ふ

▲紐育市役所は毎日二十万四千圓を支出しつゝあり

▲紐育市にては山師的投機的商賣にて生活する者十一万三千人斗りあり

▲紐育の電鐵、高架鐵道、地下鐵道に乗る者毎日四百六

十八万人

▲紐育にて産出する新脚本が毎月十五

▲紐育港に來る移民にして上陸を拒絶せらる者毎日平均三十五人

▲紐育の市街電鐵が人及其他に向て損害を惹起すること毎日五千五百圓斗にして毎日カリフォルニア洲の全人口に匹敵する乗客あり

▲紐育市にては毎年一億千八百万「ポンド」餘の綿を消費す

▲紐育には二公立動物園あり其大なるものは三千六百二十四の動物ありて千五百種に亘り爬虫類百三十八種ありと云ふ

▲紐育市には毎日四十六の家屋を新築且落成し一戸平均二千六百圓

▲紐育には人口一人に對して二個の電燈あり

▲紐育にて結婚する者毎週千四百七十八人斗

▲紐育に自働車の多き事と夥しく東京の人力車の如しソコデ制限外の速力を出して拘引せらるる者毎日六例

▲紐育の電話交換局にて呼出が每一秒時間に十六人

▲他殺、自殺及種々の災害によりて死する者紐育に毎日六人

▲紐育では毎五分時に一人生れ毎七分時に一人死す

▲紐育にて使用する自働車の平均價格七千圓

▲紐育市に入り或は市を出る者一時間内に一万一千七百

▲世界の富豪は米國に在り米國の富豪と紐育にありて財産二百萬圓以上の者が紐育に三千八百四十九人

▲紐育の芝居にて一週間内に働く俳優三千七百七十三人

▲紐育に於ける各銀行の財産を市民に分配せば人口一人に對して百二十六圓

▲紐育にて使用する上水は毎日二百十萬噸にして長サ二十一哩、巾六十尺深サ十尺の空所を充たすに足る

▲紐育には人々の出入頻繁にして到底精確なる人口數を調る事能はざれども頃日は六百二十萬人位ならんと云ふ

▲紐育の人々が毎年夏期になれば歐洲に漫遊する者多しソコデ昨夏紐育人が英國倫敦にて費せし處畧八百八十萬圓なりと云ふ

▲家道具通運會社の統計によれば初めて紐育に來るものは貸家の十階位ある家の最下階を撰び其後移轉する毎に上の階を撰び最上階に飽くるに及び紐育の中心を去りて町端に移住するを常とすと云ふ

▲過去廿年間を平均せば紐育の降雪は毎冬三十七時

▲世界中にて紐育程人々が無月謝にて實業及商業に關係せる學科を勉強する事が容易に出来る所なし

▲紐育にては一ヶ月約八百九十四の家族が増加す

▲紐育にて種々の發明に従事するもの十万人九千人

▲慈善的の病院、養育院、會が澤山なる事紐育が世界第一なりと云ふ殊に精神病者は日本の東京にては施療入院を出願しても許可の下るのが中々遅れ時によると半年もかゝると云ふ工合なれ共紐育にては何時にても即時に入院するを得

▲紐育にて銀行に預金する者二百七十五万人以上にして全人口の半ばに達す

▲日本政府の豫算(外債の利子を取除き)は紐育市役所の豫算の僅三分二強に當るとは情けない

マダありますが後便に譲る

○石橋四郎氏通信

(烟台獨立守備第三大隊分遣醫務室)
二月廿六日發 小川教授宛

謹啓時下寒氣も極度を經過し日に増し暖く相成り最早や日中は積雪も解け初め何となく春の到來も近付き候様存せられ候承り候へば昨年末御病氣の爲め手術を受けさせられ候へし由最早御平癒の御事とは存じ候へども御近狀御伺申上候切て本年一月發行十全會雜誌本日落掌仕り候が去る十一月二十七日附を以て御覽に入れ候もの登載有

之不備拙劣なる通信の貴重なる誌面を汚し候段今更汗顏慚愧に不堪候今少し精密に調査仕候へばよろしかりしを後悔致し居り候氣温表中十九日最低氣温圖(一一二、〇)は(一一二、五)の誤り暖爐に付ての記事中(凡て圓形)と申上候へしは誤りにして滿洲駐屯部隊及南滿洲鐵道株式會社等に屬する建築物には主として圓形のものを用ひ露國は主として方形のものを用ひ候故に在來の建築物には尙往々方形のものを見受け且つ温の放散面の鐵板を以て張り候代りに陶器製板にて張りしもの或は美麗に裝飾したるものも御座候右の如く粗漏なりし点多々有之候らんが他は後日詳細精査の上改めて御通知申上る事と致候茲に御訖申述べ候次に小生等一同最初渡滿の折りは定めて支那土民家屋の一部に駐屯する事と存じ居り候處當地に着後各隊露國の建設せる煉瓦造り(當時破損せる個所多かりしが)家屋に入り(或隊は其の當時支那土民家に居りしものも御座候しが現今は一二の中隊を除く他は新築、改築、落成轉住仕り候)而も尙爾後修繕改築仕り候事とてなか／＼立派と相成候當地に居りて甲乙宿舍を比較し兎や角申す者も稀に有之候も小生等内地に在勤仕り居り候しなどは下宿屋の二階一間に籠城致し居る身のかく一棟位づ、(隊附將校は二人に一棟位なるも小生は幸一人にて一棟占領仕り居り候)支給せられ居る事に候加

之長サ六尺巾四尺の大なる机一、三尺の机一、長椅子(安樂椅子)一、椅子四、隅棚一、窓掛等に至る迄貸與せられ尙近々鐵製寢台(特に將校用として大にして美しきものを外國に注文中の由)貸與せらるゝやに候又各隊には木工有之候故中隊等の暇なる節は本箱等をつくりもろふ事を得候(材料は豫想外豊に候)らへば不自由なる事は無之着任當時少々堪へ候らは、漸次整頓仕り候又日常用ひ候物も比較的安く内地下宿生活より却て勝手を申され候だけよろしく候滿洲と申せば直に無趣味と申す人有之候も小生の如く烟台即ち土人部落迄十町計り日本人は停車場附近の驛員郵便局員運送業者等を加へて四十名内外の地も居りながら過去一年間少しも苦痛を感じたる事無之昨夏は草花類を植へ又は養鶏など致し(現今尙十數羽居り候)樂しみ居り候實は養鶏に付て失敗談として滑稽有之候と申すは寒中に相成候へば物資調辨に困難仕る可く豫想し稍や多く蓄鶏致し候處却て冬期は不自由なく肉類を得らるゝのみならず腐敗の顧慮なき爲め生魚さへ參り候に反し夏期は午前遼陽より來りし肉類は夕に早や腐敗仕る有様に商人も容易に持ち來らず往々肉絶へ候前記の如く冬期を思ひ遂に一羽とも殺さざりし事に御座候鶏は滿洲を通じて一般に内地より安價なる事は既に御承知に候はんが殊に冬期而も舊十二月は實に安く烟台炭坑附近

にて二年三年位のもの一羽貳拾錢位一年位のもの一羽拾錢平均に候牛肉は一年を通じて商人の持參するものは一貫目壹圓五拾錢乃至壹圓七拾錢位に候らへども又遼陽土民の市場に於て販賣致し居り候價格は一貫目九拾錢より壹圓貳拾錢迄に候即ち百目九錢より拾貳錢迄にして金澤にて先年競争にて安かりし時節より尙半格と申してよろしき位に候次に昨年當地へ着以來の氣温を月平均温として見候に暑く相成候も早く且つ急に寒く相成り候も亦早く候然し一般に患者少なく殊に獨立守備隊は各大隊皆豫後備兵を以て編成され候故個人衛生も現役兵に比し著しく實行致し居り候事既に戰役當時滿洲を知り居るものなる故にても候はんかど存じ候而し又普通患者の少なく當大隊の如きは一ヶ大隊を通じて(一個中隊宛各地に分遣致し居り又中隊定員も普通聯隊の中隊定員より多數なり)一ヶ月新患八名位に候然れども之に反して結核性の患者は又現役者にて編成せられ居る隊に比し多く當大隊昨年間に内地還送及當地病院入院中死亡等を合して十七名計り御座候左に當烟臺に於て測定仕り候室外氣温三月以降月平均氣温表として御覽に入れ候

明 治 四 十 年	年 月 次	午 前 六 時	午 後 二 時	午 後 六 時	最 高 氣 温	最 低 氣 温
三 月	一、二、六	五、三	一〇、二	六、〇	一五、一	
四 月	六、〇	一五、九	八、六	一八、四	四、六	

(通信)

(通信)

五月	九、〇	二〇、六	一五、一	二三、〇	一一、九
六月	二〇、〇	二八、〇	二二、七	二八、〇	一七、四
七月	二三、八	三三、五	二四、四	三三、四	二〇、三
八月	二二、五	二九、〇	二三、一	二九、五	二〇、〇
九月	二三、四	二四、五	一五、四	二五、一	二三、四
十月	七、八	一六、八	九、〇	一七、七	五、七
十一月	一六、六	二、四	一四、五	三、九	一八、五
十二月	一三、一	一三、三	一一、〇	一一、一	一五、八
明治四十一年	一〇、二	一〇、四	一八、八	一九、四	一三、一
一月	一三、四	一七、二	一八、二	一六、二	一三、四
二月	三、二	二二、八	五、四	一三、九	一、八
年平均					

備考 一、明治四十年三月ハ同月二十一日以降十一日間

ニ測定セル數ヲ測定日數ニテ除シタモノニシテ度ハ凡テ攝氏ヲ以テ示ス

二、明治四十一年二月ハ同月二十一日以降測定ヲ

缺ク依テ前二旬測定氣溫ヲ測定日數ニテ除シタルモノ

三、本表中「一」ハ攝氏零下度ヲ示ス

シ 次ニ過去一ケ年間ニ於ケル最高極、最低極氣溫ハ左ノ如

最高極氣溫 三六、五 明治四十年六月二十七日
 最低極氣溫 一四〇、〇 明治四十一年一月二十日

六

次に門外漢の小生が見たる撫順炭坑に付て少々申上度き考に候

抑も撫順なる地は如何なる地かと申し候に南方長白山支脈と北方興安嶺支脈とに依りて形成せられたる地隙の稍や廣き所換言すれば両高地南方より銳角を以て接近し來り更に北方に向て開く咽喉部にして其の中央を渾河蜿蜒東北より西南に走り居り其の地形上昔の城寨を設くるには最良の地に御座候城は河北に存じ南面す其の背側は斷崖屏立し直ちに下る事を得ざるのみならず河の北岸に沿ふて東西に走る一條の道路あるのみにして昔清の始祖河南の地を併呑せんとするに當り此地を下して築城せる處に御座候故に清國歴代の此地を以て奉天に次ぐ歴史的樞要の地と致し居り候も無理もなき事に御座候城の大きは東西及南北の徑共に一町半計り南北に樓門を有し戸數百〇一戸人口七百九十九(男四百五十五女三百四十四)を有する小古城に過ぎず南門外に五十八戸人口男二百四十七女百三十一北門外に百〇九戸人口男六百九十四女五百五十四を有し城内には商家數戸を有するのみに候も南門外北門外は恰も内地の宿場の如き状態に候城内に住するものは多くは農業に従事致し居り候家屋の建築法などは普通の農家と變りし事も無之候いづれ又御通知申上る考に御座候前記の如く清人に取りては誠に大切なる歴史を有

し又各自口に樞要なる地とは申し居り候も其の實城壁は壞れ城門は破れ見る方もなき迄に荒れはて是が有名の撫順城かと思はしむる様相成り居り候而し未だ改築の模様は勿論修繕の計畫さへ無く又城内家屋も破損せるもの多く通路不良にして至て殺風景只古跡と謂ふに止まり居り候然し渾河の岸に至り候らへば又南滿鐵道沿線に比類なき景色に接し何となく心地よろしく候即ち山の間を縫ふて水は流れ來りて流れ去る様誠に小生等の拙文を以て顯す事到底不可能故止まり候只此附近は秋十月頃より春四月の頃迄は獵に最もよろしく其の有名なる獲物は雁と鶴に候以上の如く撫順なる地は名のみ名高き地に候故撫順炭鑛も人に知れ易き様名命せられたるものにて實際は城の西南約一里(清里六里)に存する千金臺と稱する丘を中心として東及西に走る小山脈一帶の總稱に御座候故事實に於て千金寨炭鑛と申したる方適當に御座候千金寨とは千金臺の北麓に存する土民部落にて日本人に據て炭鑛の經營せらるゝ様相成り内地人の漸次移住し來り其の部落の西端に遂に日本町(街)を造るに到れるものに御座候滿鐵會社にては五年計畫にて炭坑を擴張經營すると同時に千金寨なる日本市街を二十五萬坪總煉瓦建築物中心道路の幅員三十間と云ふ立派なるものを建造す可く目下の日本街より去る西方六百米突斗りに存する停車場を基準と

し制限を附したる契約を以て貸下を致し居り候(制限とは建築法及構材等)昨年十一月末調千金寨及炭坑日本人の數は二百〇五戸人口千七百十四人(男子二百六十四百五十四)に候へしが其後日々に増加し行き候事故現今は尙多き事と存じ候又目下の日本街は恰も火事後の飯屋の如く少々強き風にても吹き候らはゞ吹き飛され候らはんと危ぶむ位且つ極寒の候には家の内にて尙攝氏零下十二三度と申す位に候到底小生等の居室と比す可きものに御座なく候扱て愈々千金寨炭坑に付て少々申上候前記の小山脈の殆んど東端に老古臺千金臺との中央に楊柏堡及千金臺西麓に合計三個の堅坑を穿ち之を中心として地下數層に平坑を穿堀し採炭仕り居り候が小生の見物仕り候は千金寨炭坑(千金臺の西麓に存するもの)に御座候先づ堅坑の東側に存する斜坑を降る事約二間斗りにして早や炭層に達し以下は僅少なる狭ばみ(厚くも一尺を越へず)を以て層は益炭層内に進むのみに候約百尺に達し初めて第一地平坑縦横に走り更に一層二層と降り第五層迄目下の右の各層共に炭層内に於て十間四方の炭を残して柱とし幅拾尺高サ七尺の墜道を以て基盤状になり居り候事とて小生等の如き經驗なきものは案内者なきときは少しも自分の居る位置分らざる位に御座候第三層に於て見學者に説明する最も適當の場所所有之候と申すは元來此層は三十

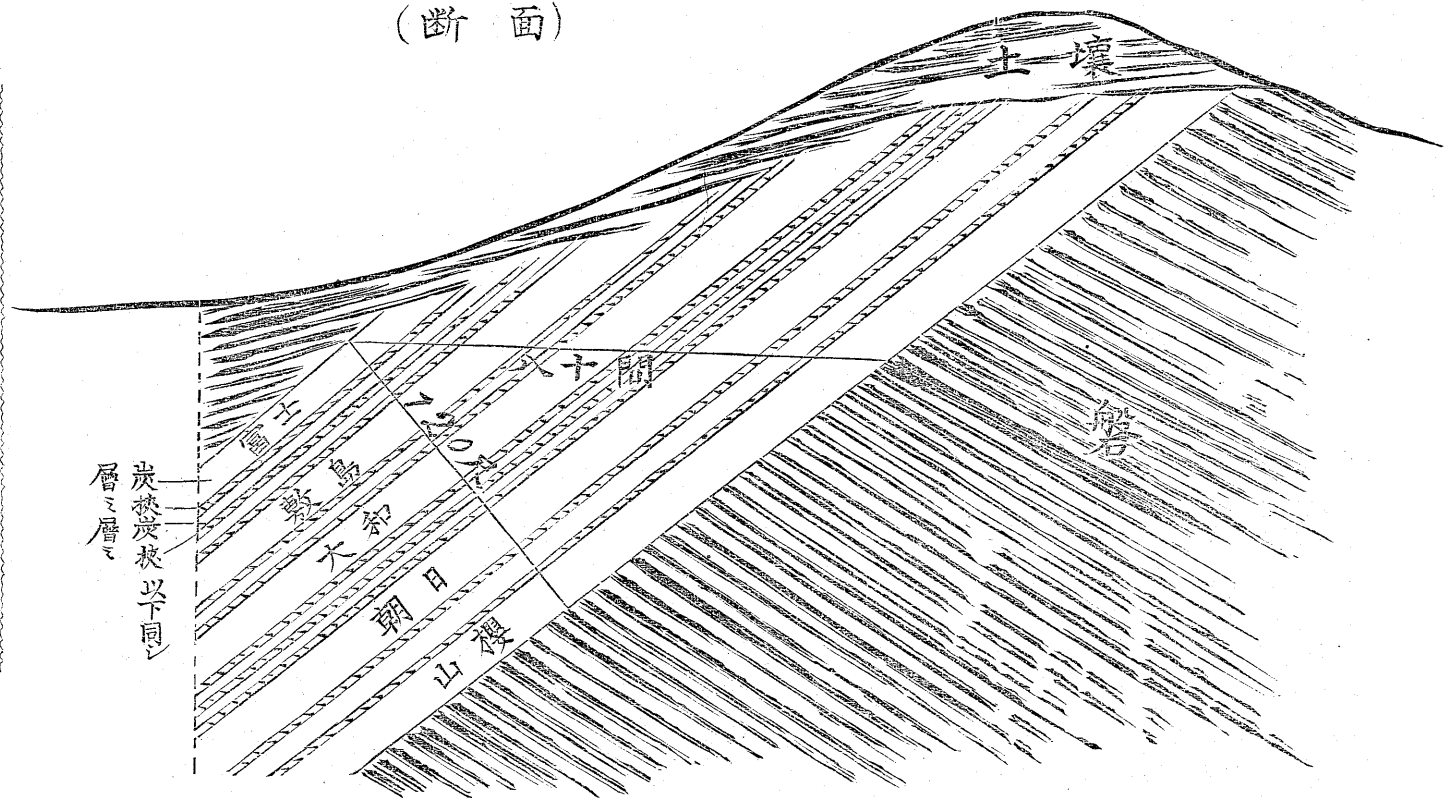
度の角度を以て南山頂より北河底に向て傾斜致し居り其の炭質上層尤も良最下層最も劣等にして前記扱み各層間に介在して各層を別つ從て其の層を現今上層より官業烟草の名と同じく富士、敷島、大和、朝日、山櫻、の五種に別ち採掘仕り居り候勿論之とは扱みのなき比較的厚き炭質の佳良なる層を専ら穿ち採炭仕り居る事にて其の層と層との間には尙數尺の炭層及扱みを有し候も其等を採掘致さずとも毎日六十噸づゝ出炭せしめて尙二百五十年間は繼續仕る見込との事にて前記第三層に於ける標本的坑道にて一々説明を受け只感心致し候のみ炭の厚さ全徑百二十尺乃至百五十尺に候も三十度の角度を有し候故此を地平に坑道を以て進み候らへば上層より最下層の盤迄八十間斗りに達し候而して最下層は却て山の頂に於ては殆んど露出する斗りと相成り居り前に斜坑の入口より二間斗にて炭坑に達する旨記載仕り候が即ち最下層の炭層にて炭質良好の炭層たる最上層は却て地下深き處にて始めて達する次第に御座候(説明圖にて御推察被下度候)露國人の設計にかゝりしは其の最下層の最も知れ易き部に御座候且つ此盤の下にも尙炭層の存否如何は目下採掘試驗中に御座候らへども先づ無き方に一般傾き居り候さて坑内通氣は如何にと申し候に現今の如く外氣甚だ寒冷なる季節には特別の設備を要さず天然の換氣にて充分に候

故只之を平等に行き渡る様要所に木戸を設備し置き候らへば可なる次第に候が夏期に及び外氣温の昇騰する時に當りて坑内は涼しく候故坑内に向て送氣せざる可からず之には全力を盡して旋風器を以て送氣致し候が理解力に乏しき支那苦力を使用して採炭せしめ居る事に候故坑道の中途諸所に存する木戸の開閉を餘程嚴重に監督致す必要有之多數の木戸の事とて苦心致し居り候勿論自然閉鎖器を附し有之候も輕便鐵道にて運搬し來り開きて一方に止めをき其の儘にて行き過ぐる等に候坑内は凡て安全燈を用ひ居り候而し坑道の壁天井地盤凡て炭ならざるなき實に内地にて見る事能はざる位のものに候由なるも瓦斯の發生非常に少なく爲めに爆發等を來す事も殆んど無之候(土人工夫中にはときに坑内にて禁を犯して寸燐を以て喫烟するもの稀れに有るも)只尤も危険なるは後に記載仕る可く候があちこちと非常に多く古坑有之其坑口の如きは既に埋没して不明故に採炭中偶然古坑を破る事に候昨年一回此事有之非常に多量の且つ濃厚なる瓦斯一時に噴出し來り爲めに六人一時窒息し一名死亡仕り候事あり是れ一番彼等の恐るゝ處に御座候水は最下層に大なる溜水池を造り各層の水を茲に導き更に第三層に蒸氣機關二臺据付ありて晝夜の別なく坑外に排泄致し居り候が恰も噴水の湧出するが如く排水溝は谷川の急流の如くに候

炭層說明圖

(断面)

第十卷 雜記 第五十號



炭換炭核以下同層

初め坑内に入る際衣服の汚染を顧慮し外套など脱ぎ候へしが却て坑内に入り候らへば滿洲の普通の道路より平坦にして只木戸通過のときのみにて實に壯大なるものに御座候又雪は只今迄空より降るものとのみ思ひ居り候に坑内にては雪は下より降るにあらで昇るにて天井に數寸の厚さ實に美麗に重垂致し居り候是れ水蒸氣等の天井に觸れて結氷致し候ものにて其の上へと積り候もの今一つ不思議と申す程のものには無之候も坑外にて見る事一寸出來ざるは氷柱の下より筍の如く生ゆる事に候小生の見候は六本計り有之候も坑の天井より滴下せる水の凍り其の上其の上と凍り行きて直徑二寸高サ六、七寸計のものと相成り居り候次に該炭山の畧誌を聞き及び候故聞きしまゝ御覽に入れ候

古來の傳説として渾河以南一般に高麗人の有なりしが唐の世に當り其有に歸し清の始祖に及び更其の手に移りしものなりと謂ふ高麗人の當地方に住したる事は炭層の或る一つに限り(下層)圓形の坑道の古坑非常に多く存じ其の古坑より時々高麗焼と稱する陶器の油壺の如きもの又皿の如きもの、残り居るを發見する事往々に御座候元來石炭を利用して磁器を燒きしは高麗人の創めし處然るに爾後數百年世人に其の方法を忘れられしものにて候由(烟台炭坑の古坑よりも時々同様器物を發見する事有之

候との事)故に高麗人の住居せし事は確に候而して其の後清の始祖の代に於ては尙士民間石炭を採掘し燃料に供し居りしが其後千金寨の撫順奉天等清朝歷代の墳墓に近き故を以て採炭を禁止せられ茲に寶庫は閉鎖せられて只羨望するのみ漸次世人の腦裡より寶藏の存する事を除去し遂に二百年從て舊坑口は埋没して認むる事を得ざるに至れり然るに光緒二十六年土民中再び當山脈に炭層の存する事を發見せるものあり奉天に於ける旗營協領八門提督三品頂戴榮倫に建言して採炭許可を出願せり依て榮倫自ら實地踏查し事實を確め時の奉天將軍增旗に復命せしも出願人二名(王承堯及翁壽)たるの故を以て不許可となりしが更に北京政朝に請願し許可証を得借區の境界を定めらる時に光緒二十七年六月なり越て八月愈々揚柏堡河南龍眼なる舊坑を開掘し採炭の緒につきしが翌年坑區侵害の論争坑主間に生じ遂に争鬭するに及びしも増旗の鎮定の策を取らざりし爲め王承堯は露國の豪商當時奉天に於て銀行を經營しつゝありしマシーフに托し將軍の審判を強請するに至れり茲に於て翁は災害の身に及ばん事を怖れ名義を紀鳳臺に移し同人をして交渉せしむ紀は更に露人ルヒロフをして代理審判を受けしめ漸くにして境界も一定し揚柏堡河東は紀、河西は王の所有と決するに至れり然るに紀はルヒロフと結托し遂に翁の權利を名實共

に奪ひ去れり殆んど同時に王承堯も亦其の權利を奪われ
 鑛區は華道勝銀行の有となれり爾後露國に於て經營する
 と同時に附近鑛區を買収せるものとの事に候而して明治
 三十八年三月十日我が後備歩兵第六十一聯隊の此地を占
 領すると同時に我軍の手に歸し同年九月十一日野戰鐵道
 第一採炭班を設けられ採炭計畫期となり明治四十年五月
 南滿洲鐵道株式會社の創立せらるゝや同會社の有となり
 遂に今日と相成候ものとの事に御座候而して露國の輓近
 採炭計畫設備と日本採炭班以後に於ける設備等を除きた
 る他は皆埋堀と俗に稱する圓形の斜坑を穿ち行き水は人
 力を以て酌出しつゝ採炭するもの故人力の到底及ばざる
 に至れば遂に他の地區に移るものに候故に地表に非常に
 多數の圓形の舊坑口を有するに比し割合に坑道短かく炭
 の量には又比較的損害は無之候も前記の如く此古き坑道
 に誤て通ずるときは溜水一時に流れ出で或は瓦斯噴出し
 て非常の損害を來すものに候由而て露國人の設備しかゝ
 りしは老古臺にて其の層はやはり下層故露人も亦如此く
 炭質善良なる上層の存する事を知らざりし如く今日に及
 び豫想外ならんとの事に御座候以上の如く舊坑より高麗
 焼と稱する陶器の堀出さるゝの外炭層間又時々琥珀を混
 ずる層有之印材パイプ等に適するもの多しとの事又小生
 が示されしものもなか／＼大なる且つ良好の物の、如く

見候其の他尙炭層に依りては其の炭液非常に硬く且つ光
 輝ありて印材に適するもの有之候由なるも現今は如此き
 間層は採堀せず専ら純炭層のみを堀り居り候千金寨には
 時々出張仕候が其都度滑稽に感じ候は支那苦力の顔に候
 炭坑に入るものは常に黒く煉瓦職は赤く石灰焼は白く其
 の職業の唯一の商標の如くに候彼等決して洗面するなく
 黒奴より尙黒く只目立は光る眼白き齒のみに候彼等亦其
 各自職業が色を顯し居るを以て誇と致し居る位故決して
 洗面致さず候尙支那家屋建築法及烟台炭坑に關し申上度
 候もあまり永く相成り候と無益なる事に貴重なる時間を
 拜借仕るも却て失禮と存じ茲に納筆仕り後日又御閑暇の
 折りに御笑ひ草迄に御目に懸くる考に御座候早々頓首



會報

○叙任及辭令其他

▲宮内省▼

叙正五位 (一月三十一日)

從五位勳五等

櫻井小平太

叙從五位

正六位

佐々木 遠

叙正六位 (各通)

全

野口詮太郎

(以上、二月廿一日)

叙從六位 (特旨) (三月十六日) 正七位勳五等

篠尾明濟

小林 茂樹 駒井 定哉

戸田伊代治

早瀬 三求 佐伯 亮齊

清水 秀夫

藤浪 謙 増田 貞吉

松村 魁

太田 長作

叙正七位 (各通)

吉田 幡誠 齋藤 賢徳

松山 俊夫

田中 潮 小原徳太郎

石橋 四郎

佐野 愛二 速水 昇

阿部 時雄

仙波 昌秋 江藤 潤一 高 伊三郎
永井 學造 山本 幹雄 池田恒太郎
朝倉 重敏 前田 豊作 井上 只次
溝口美代志

叙從七位 (各通) (以上、三月二十日)

下村義二郎 後藤 義賢 宮崎 稻作

叙從七位 (各通) (四月十日)

▲内閣▼

臺灣總督府醫院醫員從七位 中川 幸庵

陞叙高等官六等 (三月三十一日)

金澤醫學專門學校教授從六位勳六等 宮田 篤郎

陞叙高等官四等 (五月二日)

任大韓醫院教授 久 保 武

叙奏任官三等

陸、海軍出身諸氏の内閣、陸、海軍省叙任辭令は別項に載せたり

▲文部省▼

書記 高柳 謙次郎

文官分限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職ヲ命ス

(三月三十一日)

臺灣總督府

臺灣總督府醫院醫員

中川幸庵

十級俸下賜 (三月三十一日)

石川縣

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

吉田宗一

月俸拾八圓給與 (一月一日)

依願職務ヲ免ス (一月十六日)

金澤病院醫員

秋山八百藏

(各通)

金澤病院醫員

鴨脚光榮

全

七五三龜吉

依願職務ヲ免ス (一月二十一日)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

伊藤喬

月俸貳拾圓給與 (二月五日)

石川縣金澤病院醫員ヲ囑託ス (二月五日)

鷹見義郎

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

今村文碩

月俸拾八圓給與 (二月二十九日)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

鷺山謙吉

月俸貳拾五圓給與 (三月四日)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

岩佐兵藏

月俸貳拾圓給與 (三月四日)

衛生技師ヲ命ス

越野義三郎

年俸八百圓給與

檢疫委員ヲ命ス

(各通)

金澤病院醫員

蘆澤孝治

全

石坂直次郎

月俸貳拾五圓給與

(各通)

金澤病院醫員

高木琢磨

全

今村文碩

月俸貳拾圓給與

月俸參拾五圓給與

金澤病院調劑員

鷺田發次郎

(各通)

小松娼妓病院院長兼醫員

勝木直吉

七尾全

林義輔

月俸參拾五圓給與 (以上、三月三十一日)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

中村欣一郎

月俸貳拾圓給與 (四月六日)

依願職務ヲ免ス (四月十八日)

金澤病院醫員

八田智證

本校

內科學無給副手ヲ命ス

醫學得業士

原田悅五郎

依願囑託ヲ解ク

(以上、一月二十日)

内科學副手囑託

鴨脚光榮

眼科學副手兼柔道師範補助ヲ囑託ス

無給副手 吉田宗一

月手當金五圓給與ス (一月二十三日)

依願囑託ヲ解ク (二月三日)

講師

島田吉三郎

解剖學無給副手ヲ免ス

醫學得業士

佐口榮

解剖學副手ヲ囑託ス

醫學得業士

佐口榮

(以上、二月十七日)

外科學無給副手ヲ免ス

醫學得業士

鷹見義郎

婦人科、産科學副手ヲ囑託ス

醫學得業士

鷹見義郎

月手當金貳圓給與 (以上、二月二十日)

依願内科學無給副手ヲ免ス

醫學得業士

今村文碩

(三月二日)

内科學無給副手ヲ免ス

醫學得業士

樋口平次

依願内科學無給副手ヲ免ス

醫學得業士

原田悦五郎

醫學得業士

伊藤喬

校務ノ都合ニ依リ外科學無給副手ヲ免ス (以上、三月九日)

眼科學無給副手ヲ免ス (三月十二日)

醫學得業士 館保二

内科學副手ヲ囑託ス 月手當金貳圓給與

醫學得業士

吉尾開道

教授

村上庄太

學術上取調ノ爲京都府及岡山縣下へ出張ヲ命ス

雇

青木他吉郎

石川縣江沼郡山中、山代及福井縣坂井郡芦原温泉場へ出張ヲ命ス

(以上、三月二十三日)

雇申付 月俸金八圓給與

副手囑託

俵他喜三郎

解剖學副手ヲ命ス (三月三十一日)

雇

俵他喜三郎

本校出納官吏ノ帳簿及金櫃委員ヲ免ス

書記

高柳謙次郎

依願内科學無給副手ヲ免ス

醫學得業士

布村祥

(以上、四月十三日)

教授

宮田篤郎

明治四十一年度生徒身体検査醫員ヲ命ス

副手囑託

齋藤房治

全

村山常三郎

全

蘆澤孝治

全

吉田宗一

全

鷹見義郎

全 吉尾 開道
明治四十一年度生徒身体検査醫員ヲ命ス

助教授 松田 菊治
教務囑託 南部 彰義
履 宇野 益之

明治四十一年度身体検査委員ヲ命ス
庶務課主任兼務ヲ命ス
書記 山本兵三郎

(以上、四月十五日)
正可寡婦 楠 邦

故體操副科弓術教授方囑託楠正可存生中囑託方特別勳勳ニ付手當トシテ金
參圖給與 (四月二十二日)

* * * * *

○陸、海軍出身特別會員

諸氏の昇進、移動等

○陸軍々醫學學校學生 本年第一回學生として一月十五日
入校の本會特別會員は左記の諸氏なり

一等軍醫 増田 貞吉 二等軍醫 前田 豊作
二等軍醫 瀧口美代志 三等軍醫 山田伊之助

三等軍醫 一宮重之助 三等軍醫 千田常外

三等軍醫 福岡捨雄 三等軍醫 正木美澄

○左記の諸氏は陸軍二等軍醫に昇進せらる(一月三十一日附)

下村義二郎氏 後藤義賢氏 宮崎稻作氏

○陸軍二等藥劑官 山岸理一郎氏 是一等藥劑官に昇

進(二月十日附)

○海軍中軍醫 三野賢吉氏 是盤手乘組を免ぜられ第

九驅逐隊附に補せられたり(二月七日附)

○陸軍一等軍醫 熊谷兵次郎氏 是歩兵第十九聯隊附

なりしが野砲兵第八聯隊附に轉補せらる(二月七日附)

○陸軍三等軍醫正 鶴見金十郎氏 是歩兵第十九聯隊

附兼教賀衛戍病院長より歩兵第三十六聯隊附兼鯖江衛戍

病院長に轉補(二月十四日)

○海軍中軍醫 伊藤顯徳氏 是海軍工機學校附を免ぜ

られ舞鶴水雷團附に補職(二月十九日附)

○海軍少軍醫 長井運男氏 大湊要港部附なりし氏は

大和乘組仰付らる(三月三日附)

○陸軍一等藥劑官 松坂治助氏 鐵領衛戍病院附より

東京第一衛戍病院附に轉補(三月十日附)

○陸軍二等軍醫 春田久太郎氏 工兵第九大隊より歩

兵第六十九聯隊附に補せらる(三月十日附)

○同 羽根田信次氏 歩兵第六十九聯隊附の同氏は春

田氏の後を襲ふて工兵第九大隊附に轉ぜらる (三月十日附)

○陸軍三等軍醫 佐々木純一郎氏 歩兵第四十聯隊の

同氏は第十師團軍醫部々部被仰付れたり (三月十三日附)

○海軍大軍醫 中野才幸氏 永興防備隊軍醫長なりし

氏は海軍々醫學校學生仰付られたり (三月十五日附)

○陸軍三等軍醫 西村順八氏 歩兵第七聯隊附なりし

氏は今度更に同聯隊附に補せらる (三月三十一日附)

○陸軍三等藥劑官 湯淺啓一氏 是金澤衛戍病院附と

して勤務せられしが休職被仰付たり (四月十八日附)

○陸軍二等軍醫 永井學造氏 輜兵第十八大隊附の氏は今般第十八師團軍醫部々員に補せらる (五月七日附)

○特別會員動靜錄

○北川健三氏 凱旋後金澤市長町川岸に於て外科専門を以て開業せられたるも都合によりて今春早々越前敦賀郡立病院長として赴任せられたり

○辻本辰之助氏 凱旋後郷里能州能登部驛に於て開業せられつゝありしが先般鹿島郡有私立第一七尾病院(通稱神明病院)を引受け自ら院長兼院主となり諸般の設備を改良し組織を新にし去二月一日より花々しく開院せられ且つ紀元節の佳辰を下して同地青海樓に於て盛大なる披

露の宴を張られたり吾人は氏の爲人を信じ其大成を祈る頗る切なるものあり

○鴨脚光榮氏 山崎内科部を辞し前記辻本氏の病院に内科主任として敏腕を振はる

○七五三龜吉氏 外科第一部を辞し同じく辻本氏の病院に轉じ外科主任として令聞あり

○鳥誠郁氏 凱旋後東京大學三浦内科介補勤務中の處去三月一日より金澤市石屋小路に於て内科小兒科専門を以て開業し同三日尾山社畔金谷館に於て披露の盛宴を張られたり、篤學謹厚當世稀に見るの士、其成功や期して待つべきなり

○丸谷熊次郎氏 金澤病院婦人科醫局を辞し舊臘山形歩兵第卅二聯隊に一年志願兵として入營せらる

○酒井利勝氏 舊臘末の方、歲將に新ならんとするに際し全婦人科部を辞し郷里越後に歸られたるが、程なく高田町知命堂病院に勤務せらるゝ事となり、着實に其蘊蓄せる仁道を施して濟生の術に従はる

○秋山八百藏氏 去ぬる正月同じく婦人科部を辞し婦國せられたるが春風落蕩の候開業せられたり

因に丸谷、酒井、秋山三氏は共に一昨秋卒業、新進氣鋭の人にして將來の業刮目に足るものあるべし

○小泉永宣氏 昨秋富山赤十字病院を辞し山崎内科に副

手として勤められたるが舊臘婦人科部に入られたり、寛裕の資恬淡たる性眞に愛すべし

○鷹見義郎氏 外科第一部副手を辞し婦人科に入らる

○鷺山謙吉氏 曾て婦人科部に研鑽せらる、事半歳に餘りしが、今回一年志願兵豫備見習醫官第一種勤務を終へ再び同科に入られたり、這般の就職同科の爲め大に賀すべきなり

○高野宗重氏 本會講話部委員として夙に校中第一の雄辯家を以て衆の推す所たりしが昨秋卒業後佐々木内科に副手として研究せしも二月中旬朽木縣立宇都宮病院に赴任せられたり

○奈良八郎氏 昨夏金澤病院眼科部を辭し秋風立ち初むる頃富山市に於て開業せられたり

○片山良作氏 新春渡歐せられたる田上清貞氏の眼科院に在りて益靈腕を振はると云ふ

○堀田圭三氏 凱旋後再び金澤病院眼科部に入られたるも舊臘辭職歸郷開業せらる

○館保二氏 卒業後一年志願兵として歩兵第三十五聯隊入營、今回豫備第一種勤務を了へ全眼科部に入らる

○岩佐兵藏氏 同上、全婦人科に入らる

○森義作氏 同上、郡立敦賀病院赴任、

○織田秀時氏 同上、富山赤十字社病院就職、

○高橋幸七郎氏 同上、郷里越中、中新川郡、中加積村に於て開業せらるる筈の處今回他に入家し滑川町に於て開業せらる

○田村圓四郎氏 在富山北陸生命保險會社醫就任、

○樋口平次氏 歩兵第七聯隊同上、山碕内科に入らる

○今村文碩氏 鴨脚氏の後を襲ぎ山碕内科醫員拜命、

○伊藤喬氏 七五三氏の後を襲ぎ外科一部同斷

○吉田宗一氏 堀田氏の後を襲ぎ眼科部同斷

○近郷重孝氏 一昨春東上、大學皮膚病科に在り、一度歸郷開業せられたるも昨夏令妻逝去後再び東上、目下百

瀬立溪氏方に研究せらる、追て來六月を期し富山市に於て外科一汎を以て開業せらるべしと云ふ

○鷺山他三郎氏 其後病氣全く快癒し昨秋以來東京大學

佐藤外科に専心攻究是れ日も足らず今五月頃多分越中滑

川町に於て開業せらるべし

○横井嘉亟氏 昨夏來東京大學青山内科に在りしが去二

月下旬臺北病院内科に赴任せられたり

（以上、は、た生記）

* * * * *

○本田三郎氏 夙に耳鼻咽喉科及外科を専攻し縣下石川郡大野村字觀音堂にて開業、また分院を大野町に設け、門前常に市をなすの盛況なりしが、向上的氣宇に富める

氏は發展の第一歩として、今春四月初旬、金澤市下新町に轉居、開業せられたり、猶毎日午後觀音堂の醫院へも出張する由、

○鹽谷義一氏 海軍大軍醫なる同氏は今春寺本と改姓せらる、

○眞柄佐一郎氏 滋賀縣大津赤十字病院内科に在りて令聞高き氏は同支部より傳染病研究所入學を命せられ、今年一月入所、四月卒業歸院せられたり、

○阿部可一氏 久しく名古屋好生館にて佐藤勤也博士の下に研鑽怠るなき氏は更に臨床細菌學研究を志し本年一月傳染病研究所に入られたり、

○村田讓氏(現姓 丸山) 一昨年夏、東京醫科大學に於て新たに整形外科を分つや田代教授に擧げられて助手となり、教室の設備、畫策に奔走し、整形外科及一般外科をも研修したる氏は去秋辭職の上、今春郷里越後に於て開業

○小岩井長四郎氏 さきに福岡病院眼科に、後、福岡醫科大學眼科教室大西克知博士の下に助手として敏腕の稱ありし氏は目下、福岡市に於て眼科専門にて開業、遠近相傳へて治を乞ふもの常に市をなすの盛況なりと云ふ、
○吉住保氏 宇都宮病院外科部長の職に就き俗腕の譽高かりし同氏は昨春東上、暫らく東京醫科大學土肥教授の

皮梅科に研究を積まれしが、今春歸省、金澤市仙石町に於て外科、皮梅科、耳鼻咽喉科専門にて開業せられたり、
○佐々木辰實氏 病痼の爲め海軍々醫を退き本校細菌學教室に在りし氏は、去秋より市内石浦町山田醫學士の止善堂病院に入りて内科を擔任し、傍同教室に通ひ熱心研學に従ひつゝありと云ふ、

○青木政枝氏 數年前より能登七尾町に於て敏腕を振ひつゝありし氏は客年末、七尾病院の經營を辻木氏に譲りたる後、同地に開業せらる、

○林豊丈氏 目下金澤市英町にて開業、

○笹田順二氏 歩、七、に一年志願兵服務中なりし同氏は十二月除隊後、市内新町にて開業、

○近藤勇記氏 山形及仙臺に於て同上の氏は今二月勤務を終り、山形濟生館病院に赴任、

○佐崎伊久氏 歩、卅五、にて同上の氏は五月より富山縣高岡市にて令名高き本會特別會員大澤五月氏經營の病院に入り外科を擔當されしと、

○池田菱吉氏 本校醫化學教室に在りて精勤怠るなし、
○小原貢氏 藥學得業士なる同氏はかねて金澤稅務監督局技手として頗る篤實熱心に醸造業の示導、監督に従ひつゝあり、今春同局鑑定部長の職に進めらる、
○新次郎氏 藥學得業士の同氏は今回、市内山田止善堂

病院藥局主任に就職、

○洲崎歸一氏 卅九年卒業後、東京佐々木杏雲堂病院に於て研學につとめし同氏は今年二月歸省、金澤市堅町にて内科、小兒科一般の診療に従はる、

○村山貞二氏 歩、七、にて一年志願兵勤務の同氏は今春三月福岡醫科大學助手となり法醫學教室に研學、

○村本淳吉氏 同上の氏は縣下松任町にて開業、

○西村政吉氏 同上の氏は金澤市古道にて開業、

○福田四郎氏 同上の氏は明治生命保險會社診査醫となり越中高岡に在り、

○井本清吉氏 京都醫科大學婦人科教室に研學中なりし氏は一年志願兵として目下歩、卅五、に在り、

○屋當祖德次郎氏 郷里沖繩縣那覇病院外科に勤務中なりしが今度同地に於て開業せらる、

○龍田恭齋氏 卒業後福岡醫科大學醫學教室に研學、昨秋轉じて、名古屋好生館に於て臨床を學びつゝありしが、今五月、郷里飛彈にて開業せられし由、

○平泉泰雄氏 昨夏金澤市金城療病院内科に入りし同氏は四月下旬辭職、郷里越前に開業、

○笹岡芳名氏 東京醫科大學皮梅科に研學、

○深澤治三郎氏 本校佐々木教授の内科に於て研鑽中なりし同氏は二月、大阪衛生試驗所に入らる、

○吉田文平氏 京都醫科大學外科教室にて研學、

○水口順氏 本校山崎教授の内科教室副手として研鑽中、

○布村祥氏 本校山崎内科副手たりし同氏は今春富山赤十字病院内科に赴任、

○仙場松齋氏 三月、北海道區立札幌病院外科醫員として赴任、

○山田外來雄氏 金澤市、金城療病院外科醫員なりし同氏は今度歸省開業、

○中村欣一郎氏 昨秋卒業後、本校細菌學教室に入り臨床細菌學研學中なりしが、四月、金澤病院佐々木内科醫員となり専ら細菌室を擔當すべしと、

○平澤謙齋氏 五月、本校宮田外科副手を辭し能登羽咋町にて開業、

○橋爪元吉氏 今春本校外科第一部副手を辭し郷里富山縣にて開業、

○塚崎茂氏 金澤市春日町にて開業、

○白井濟氏 東京醫科大學整形外科教室に研學中、

○西村銀太郎氏 全青山内科勤務、

○數見宗一郎氏 藥學得業士なる同氏は富山縣立藥學校教諭たりしが今度退職となり、富山市にて開業せらる、

Sch
Kolle Kolle W. Substanz

(通信)

○八田智證氏 卅六年卒業後直に本校小川教授の産、婦人科に入りてより茲に六歳、其間研學に、診療に孜々怠るなく、小川恩師の知遇に感じ、そが寵兒として頗る精勤を抽てらる、また本誌上、犀利、流麗なる筆を振はれ、或は原著に又は實驗、雜纂欄に於ける大、小十數篇は君が研學の余瀝にして、殊に特別會員動靜錄と通信欄とは每號殆んど君の筆と君が斡旋に出ずるものなりき。昨春微恙を得られしも幾くもなく身神共に回復に向ひしが、爾後暫く閑散に入らんの意あり、其爲め四月中旬辭職の上、靜養旁々金澤市彦三町金城療病院に入り新設の産、婦人科部長兼内科擔當として五月一日より診療に従はるゝ事となれり。

四月廿七日夜、醫局、知友の發起にて金谷館に於て君の爲め祖道の宴を張らる、集るもの高安院長はじめ、各部長、醫員、本校職員及市内開業醫等合せて四十余名にして頗る盛會なりしと云ふ。

頃日、記者に語るに君が院生活の既往を以てし、小川先生の下に在りて日々研究にいそしむを得ざるは實に遺憾にして、恩師が慈愛と恩情とは粉骨碎身猶忘れざる所なりとて、左の所感一絶を示さる。君の胸裏誠に察するに余あり。

去金澤病院有感

疎狂愧我生 拋錄一身輕
心事與誰語 悠悠任世評

さわれ、君が前途また遼遠なるあり、幸に自重加餐、大にわが學界に、仁術に活動せられん事希望に堪はず。

因に、君には、現任地と母校院とは目睫の間なれば、今後も筆をわが誌上に寄せ、幾段の光彩を添へらるゝ筈あり。

○田上清貞氏の着獨 一月十一日神戸解纜の博多丸にて渡歐の途に上られたる同氏は、海上恙なく二月下旬無事着獨、ミュンヘンに於て研學に従はれつゝあり。吾人は、君の益々壯健に且我邦醫學の面目發展に励め斯學界に貢獻する多大ならんを望む。

氏の宿所は左の如し

Sollen bei München,
Terlanenstr. 4,
Deutschland.

○下平教授の近況 渡歐後ベルン醫科大學に於て孜々研鑽を積まれつゝある下平教授には、さきに、外科學の泰斗 Kocher 教授の助手に擧げられ、また細菌學者間近時出藍の稱喧しき Kolle 教授の研究室に出入し、不日、其一業績を公にせらるべしと。吾曹は遙に先生の健康と祝福を祈るや切なり。

猶、今回轉宿せられし由、一三月四日發通信、

Monbijoustr. 6,

Bern,

Schweiz.

○羽根田信次氏の獨國留學 陸軍二等軍醫なる同氏は、今般細菌學研究の目的にて二ケ年間獨逸國留學を志し、五月七日、金澤出發、鵬程に上られぬ。吾人は双手を擧げて君の行を壯にし、幾年研究の曉、幸に齎す所甚大ならん事を囑す云爾。

* * * * * (以上、よし生)

○田上涉氏の遠逝、陸軍一等軍醫從六位勳五等田上涉氏(廿九年十一月卒業)は本年三月十六日病魔の爲め遂に逝かる。謹で哀悼の意を表す。

○小椋正香氏の死去、氏は三重縣河藝郡白子町の人、去る卅三年本校醫學部に入り、間もなく病を獲て休學、翌年再び學に就き、卅八年卒業、其後は金澤監獄醫、石川縣娼妓病院醫員、再轉して縣下小松町勝木醫院醫員となり、昨秋錦衣歸省、業を開かれしが、幾もなく宿痼再燃し五月六日蓋然として逝かれぬ、年廿七、氏、人となり温厚、篤實にして、深く西教を修め、夙に安心の境に達せり、學に在るとき、業に従へる間、温良

なる特質は常に氏の人格をして崇高ならしめき。爰に業半ばならずして夭折せらる、嗚呼可惜哉。

三年の第二次級會

雲外生

大厦高樓に晏居して飽食暖衣心の欲する所に隨ふ何爲ぞ爽快ならざる、顯官高位を占めて天下の大政を操縱す何れぞ怡樂ならざらん、されども青春の活氣萌て未だ塵世の風波を識らず、偏に造詣の上達を計りて常に休戚を俱にせる予等が胸襟を披きて恣に談笑するの滋味に比すればげに遜色なからずやは、吾は此圓滿にして理想に富み、趣味に深き我級會に想像の翼を擴ぐる毎に、血燃の肉動きて、自ら仙郷に飛翔するの感あり、あゝ此浮世の樂園、見よや、平和こゝに花の如く榮え、安慰こゝに泉の如く湧く、我等は何の語を以て此歡嬉を現はすべきかを知らざる也。

寒風蕭々として殘雪は疎林を賑はし、春雨屋端に滴つて幽意坐に滿つ、誰か能く一片悵愴の感に打たれざるものぞ、此時に當り我三年級の第二次級會は本校病理組織實習室に於て開催せられたり、會する者は、高安校長を始め、宮田、村上、石川の各教授、小原講師並に我親愛なる級友、無慮百有餘名、各々其情琴を鼓して、彼處に高

談し此處に放語して、和氣洋洋たり、やがて松村君は劈頭、開會の辭を陳べ、加ふるに有志の諸君は、學校及我級に對する希望をも忌憚なく言明せられたしと言ひ畢るや、宮田級長は悠々として演壇に登らる、あゝ此一刹那、予は額を鳩め目を瞪つて、窃に其聲の漏るゝを俟ちぬ、教授は著實なる風姿を以て、先に公表せられたる級會の規定は、未だ教授會議を経由したるものにはあらで、予も只漠として其通報を受領したるのみなれば、其説の正鵠を失するや否やは識らざれども、其大意を忖度して、予の見解を舒ぶべしと、痛快に一棒を試み、更に各條項に就きて簡潔に評議し去り、殊に勤儉の條下に到りては、二宮尊徳翁が幼時の苦學談並に報徳の教を引用して、之を余等の肺腑に映射せしめらる、洵に純然たる責任の大義より立論せられし周到なる識見にして予等は唯々として拜聴したりき。

次で高安校長登壇せられ、天稟の慈眼を以て滿堂を一瞥して後徐に、予は三年級には講義を擔任して至大の關係を有するが故に、進んで出席したりとの前驅を置き、更に級長の趣旨を推證して級會の新規定を慎重に闡明せられ、諸手は宜しく該規定を目して冷酷なる予涉又は偏狹なる法則なりと曲解する事なく、詮するに此主旨たる也學生の本分を冒瀆せざるに在りとの斷案を下して、寛濶

の雅量を顯示せらる、此時本分てふ一語は、いたく我鼓膜を刺戟したり、嘗て、マーデン翁は「圓滿の發展を遂げんと欲せば真に本務を自覺すべし」との警句を貽しぬ、又英國の詩聖は萬幅の至誠を捧げて謠へり、

“Honor and shame from no condition rise,
 act well your part, there all the honor lies”

あゝ何等高調の福音や、苟も冷靜なる態度を持し、穩健なる常識に訴へて、之を斷味せば曷ぞ區々たる定規に左右せらるゝの愚に陥らんや、チルソンはトランアガルの海戦に名譽の戦死を遂ぐる時告げて曰く、

“Thank God. I have done my duty.”

と、借問す、真に能く胸裡の奥底より之を吐露し得る者幾許や。次で石川教授は、滿面に笑波を湛へ、簡單なるインツツ物語の一篇を紹介して余輩が修養上の訓戒を與へらる、其眞意の果して那邊に在るやは、姑らく聽者の判斷に想へんのみ。次で石田君は過去より現在にまで進歩し來れる經路を回顧して、將來倍々一縷の光明を求めて向上の白道を辿らざる可からずとて幾多の比喩を臚列して辯述せられしも、其趣旨の始終一貫せずして眞意を捕捉するに苦しめ、所謂龍を畫て睛を點せざるの憾あらしめたるは、須らく君が反省を請はざるを得ず、されど窃に侏儒の技を演じて得々たるの徒に較ぶれば其

逕庭たるや決して鮮少ならじ次で近藤君は "No. Bea gentleman" と題して、世俗の紳士に對する誤解を道破して、所謂紳士の資格を辯明し、其最も緊要なる人格の涵養に、就て似而非紳士の缺陷を痛快に罵倒して一大鐵槌を加へ、例證を提供して更に人格と活動との關聯を舒べらる、憶ふに近時人格の修養に關する書籍の頻々出版せられて、しかく爛熟したる塵世の需要を充しつゝあるは驕喜すべき現象にして、予は人格の完成は現代の目して成功と稱するものに妥當なるべしと斷言するに躊躇せず看よ、崇高なる人格と相俟つて、扨て富貴も意義あるべし、權勢も意義あるべし、將た又知識、才能、事業その價值を有するに非らずや、孔子の仁道、耶蘇の博愛説も其嵩美なる人格と相映煥して始めて無限の眞價を發揮するものに外ならず噫高邁なる人格を具備するの紳士、予は執鞭の奴となるも以て快とせん、世の近視者流、品位の精華を咀嚼せず、徒らに齷齪として名利を是れ漁る、洵に愚の極にして痴の至とこそ謂ふべけれ、高山博士は曾て太陽誌上に『人格の力』と題して曰へらく、

世間にはオーソリチーに對する信仰とし云へば、直に迷信と同一視する人多し、されど吾人を以て見ればオーソリチーに對する信仰ばかり確かあるは少し、オーソリチーを信ずとは、其言を信するに非ずして其人を信する也、其高大なる人格の現はれたる一形式として其言を信する也、古の所謂言は人あるもの即ち是れ也、(中略)法學校の一年生

にも伊藤侯位の政治論は随分出来るものあるべし、哲學を一通り學びたらん人は加藤博士の功利論位は説き得ずとも限るまじ、唯吾人は其説の伊藤侯の口に出で、加藤博士の筆に上れるを見る時は、何やら重みある様に覺ゆ、○は理外の理也、所謂オーソリチーの信仰也、天下の事概れ是の如し、されば其言を以て相争ふは表面上の事也、争ひの根本は人の争也、性格の争也。(後略)

と言ひ得て餘蘊なし、多田鼎氏曰く、

一切の人格皆私に對して過去及現在に多くの導きと思きを與へ、又將來に之を與へてくる、世上の男女が隨落の淵に沈むのは、互に其人格に對する恭敬の念を失うて他を輕んじ他を禽獸のやうに視る故である、禽獸を賤しむ心を以て人格に對す、其道を誤るのは當然である云々(下略)

と眞に尊重すべきかな人格や。終りに蒞み小野澤君は實例を引證して丕に我級の眞面目になりたる事を推奨し將來倍々左提右挈して眞面目に發展せん事を渴仰する旨陳べられたり、眞面目とは、造次頓沛の間と雖も決して藐視すべからざる千古の金言にして眞理が宣告せる鐵案也、眞面目の範圍を脱しては決して事物の完美すべきものに非らず、彼の、沈毅なり、儒逸なりと謂ふもの唯眞面目なる人の能くする所のみ、かるが故に曉鳥氏は曰へらく、

職業に於ても經營に於ても、道德に於ても、宗教に於ても、文藝に於ても其他百般の事柄に於て其最上の政策、其最上方法、其最上の實力は一語にして之をつくす事が出来る「眞面目にやる」、之が人世百般の事柄の最初の一步であり、又最後の住所である、職業に於ける成功

の秘訣は、眞面目の一言を以て竭す事、出来る云々、(下略)

と、寔に然り、現代の寵兒、後藤男は、ルーズヴェルト氏の風采を懐仰して曰く、氏は徹頭徹尾眞面目の人に於て、如何なる困苦に際會するも、眞の一字を唯一の武器として、奮闘は活動して今日の如き偉大なる人格を發揮し得たるに外ならずと、眞面目の奈何に予等に須要なりやは蓋し思半ばに過ぎん、我等は勵めて良心の麻痺を防ぎ、堅實なる此地盤に立脚して、己が命運を開拓せんかな。

更に余興に移れば田山、久保、坪田諸君のバイオリンあり、各々獨得の技倆を揮揮して嚶唳たる美音を弄せらる、次で本間君の詩吟(捨子)に奥田君の劍舞あり、言々句々眞に逼り、人間の至情も慙くやと惚はれて漫ろにゆかし、畢りに甚じう俟ち焦れたる福引の余興あり、或は豊果を収めて得意満面に溢るゝあり、或は空籤を擲んで不平を眩くあり、とりぐにをかしく抱腹絶倒を禁する能はざりき、さるにても百有餘種の福引を調整せられたる當事者が苦心の痕、さこそと思ひ遣らるなれ、斯くて各充分の驕喜を竭して歸途に就きぬ、あはれ、幽雅なる樂園に逍遙して、霎時快よげに其無限の甘美に酔ひにし予は、儂なくも一炊の夢つと醒めて、再び忌はしき闇黒の囹圄に還らざるを得ざるかと、むらゝと躍る血汐のかせわ

しく、折しも夕陽は危峰に沈みて、蒼靄濃やかに四方を罩め、曁に歸る寒鴉のたゞゞに二聲三聲。(をほり)

○柔道部記事

委員 照陽生

▲寒稽古及大會

寒風梢を掃ふて桐葉散り果て北風凜烈として吹きしさるの候膽を磨き勇を練るは此時なれと例に従ひ十二月六日午後六時より二十日迄十五日間前期寒稽古を舉行す、音に響さし濟々堂裏は血氣の若武者を以て滿ち垂百の健兒勇々敷も寒を冒して來會せり、越て年改まり難關たる前期試験を終り鬱勃たる霸氣蓋ふ可くも非ず待に待たる后期寒稽古二月二十一日より開始と揭示あるや勇氣凜々として前期に劣らぬ垂百の健兒は北風酷寒を交へて其鋭さ身を劈くに屈せず刻に先て來會し壘ヶ原に鐵腕鐵脚身心練磨に之れ勵み天下學生の趨勢將に遊惰に陥らんとするの秋、我が校の一隅に於て聳然たる勇氣を藏し濟々として盡きざらしめし勇士實に半百に達し殊に第四年級の若殿原は將に迫らんとする難關に備へ乍ら前來未聞の多數の皆勤者を出したる壯舉は實に心地良き事共なりけり

吉川友信

酒井碩治

右兩氏は四ヶ年間柔道寒稽古皆勤せられしに由り特に金「メタール」を賞贈せり

第四年級	小西孝徳	城谷隣賢	金子義長
	小林進	宮村誠一郎	中川善松
	河合勝	辻井禮太郎	藤井最正
	太田得郎	中谷内善雅	關根平
	淵原隆庵	酒井碩治	吉川友信
第三年級	眞縮修平	八賀重藏	高澤冠一
	大井藤次郎	高田茂一	平野郷次郎
	須賀芳篤	上野善藏	佐竹秀一
第二年級	松下嘉右工門	小幡一志	室田茂人
	太田尙男	明石秀次郎	坪倉利
	高橋重作	北村祐壽	
第一年級	大武國治	池上豊	和泉松太郎
	宇賀治元造	西川佐吉	池口道夫
	大脇彌平	國田武夫	井土又吉
	後藤重彦		

凜烈たる醫王山嵐に浴して肌骨を鍛へ、嚴冬三旬白體々の飛雪を蹴て練りにし技倆顯すは晴の戦裏なる、わが大會議しと満校勇士の面々、ひそかに腕を扼して鶴首しぬ、時は來れり三月八日！午前十時を以て開始、

高安會長、石川部長臨席せられ、三段藤善稀雄、二段吉田宗一の両先生審判の下に、互に變立の秘術をつくし龍虎相争ふの壯觀實に目覺しとも目さましかり、之が番組、

勝負の模様次に記すが如し、
此日、本校諸先生はじめ、學生、他校生徒の看者場に満ち、霸氣堂に溢れたりき、

▲一本勝負、一人抜

○井土又吉	△住田立	△松下嘉右工門
×和泉松次郎		
×上野善藏	×太田得郎	
△後藤重彦	△高橋重作	
○泉田義友	△不破才三郎	△小幡一志
○大脇彌平	△中谷内善雅	○國田武夫
△室田茂人	×奥山義盛	
△池口道夫	△大武國治	△清水仙岳
△酒井碩治	○宇賀治元造	△塚本政次
△馬場庄衛	△眞縮修平	△關根平
×辻井禮太郎	△宮村誠一郎	×近藤益成
△矢野孝次	△八賀重藏	△金子義長
△淵原隆庵	△小林進	△須賀芳篤
△中川善松	△平野郷次郎	△河合勝
△○坪倉利	△明石秀次郎	△西川佐吉
○池上豊	△小西孝徳	

▲三本勝負

大内莉	小外莉	体落	小幡一志
△大外莉	△上野善藏	△室田茂人	
△小外莉	△浮腰	△足拂	△泉田義友
	△小外莉	△中谷内善雅	△奥山義盛

足拂、足拂 (大) 武國一治

大内莉 (高) 澤道夫
業 (酒) 井碩治
片手絞 (辻) 井禮太郎
(近) 藤益成

●講道館柔道投之形

●講道館柔道勝負法之形

腰車、体落 (二) 中 淵野正敬
釣込腰、釣込腰 (一) 中 上野久太郎

袈裟固 (一) 中 金子隆義
二巾 (二) 中 庭石秀次郎

●大日本武徳會柔道勝負法之形

大外莉 (一) 中 藤村孝治
業 (四) 高 池澤重親
外來 (小) 田林退

袈裟固 (清) 水仙正

大外莉 (真) 關根修平
大外莉、浮腰 (中) 賀重藏

藤善友信雄

佐藤善秀一雄

大内莉 (二) 中 窪村誠一
大外莉 (二) 中 土田與三郎

袈裟固 (須) 賀芳篤

藤善友信雄

大内莉 (二) 中 浮腰 西川吉二
業 (四) 高 小西孝德
内捲込業 (北) 村祐壽

四高 (長) 屋金一吾
裸絞 (佐) 竹秀一吾

寒稽古皆勤證書及進級證書授與式

上記皆勤者へ皆勤證書を左の諸氏は進級證書を授與せらる

一級に昇進せしむ	三年級	佐竹秀一
二級に昇進せしむ	四年級	小西孝德
同	全	城谷隣賢
同	二年級	北村祐壽
三級に昇進せしむ	全	明石秀次郎
同	一年級	池上豊
同	全	西川佐吉
同	全	河合勝
四級に昇進せしむ	四年級	宮村誠一郎
同	全	小林進
同	全	金子義長
同	全	辻井禮太郎
同	全	中川善松
同	全	關根修平
同	三年級	眞館修平

當日、高安會長より皆勤證書授與の榮を戴きぬ、其氏名左の如し

森 善次	畑 千尋	笠 上由松
菊田文雄	小幡一志	高橋重作
須賀芳篤	鈴木忍	石川元良
加茂智榮	萩原忠	大脇彌平
豐田 銳	阿波加憲治	北村祐壽
大武國治	河崎幾左右	大野幸重
池上 豐	渡邊八之進	太田尙男
高澤冠一	戸澤和一	岡部千太郎
御影藤太郎	湊 久助	岡部忠清
鹽谷直作	明石秀二郎	重野 諱
才田猶次	住 田 立	本仙太郎
田中三彌		

また今回進級の榮譽に預りしは次の諸氏なり

二級に昇進せし者

才田猶次	澤高冠一	本仙太郎
小林良二	曾田米三郎	

三級に昇進せし者

敷田雄登記	加藤末吉	澤村恒松
御影藤太郎	池上 豐	萩原 忠
大武國治	絹川義温	

四級に昇進せし者

大野幸重	近藤清吾	重野 諱
高橋重作	岡部忠清	菊田元雄

(會報)

武長久男	岡部千太郎	明石秀二郎
笠上由松	戸澤和一	

五級に昇進せし者

金子義長	松生哲良	須賀芳篤
畑 千尋	泉吉守	渡邊八之進
島田靜雄	河崎幾左右	鹽谷直作
湊 久助		

[畢]

○高安[◎]在職[◎]二十年祝賀會[◎]記[◎]

咲きも遅れず散りも初めず、こゝ許十二分の花の笑顔に、心いつしか蝶となつて、春ひと時の綾羽袖、櫻が化粧の姿を凝らせば、遠山の黛青く、若草の緑、春水の流れ、景色は既に齊つた、昨日まで繽紛たる粉雪に惱んだが今は花の白雲たなびいて百万石の城下を包んだ。

卯月の中の八日は校長高安博士在職二十年の祝賀會を催すとて、當局の人々、足を空ざまにして東西に馳せ廻つた、其の日は快晴、花より明けた。

正午より初まると云ふ、刻前、人、車は廣い通りに輻湊して盛會なるかを知らしむる、綠門高く、常盤の香ひ

目出たく、春風に搖めく大旭の旗、祝賀と記した扁額の下を學生の群れば絶えず通る。

會場は濟々堂で空席は無い、市内、縣下は云はずもがな、遠く越中、越前より越された卒業生と、先生の同僚知己の方々は、フロックに軍服を交へて場の一半に溢れ、こちらは博士が愛兒の學生が、丁度鮮詰のようになつ居る、大花瓶に花は満ち、幾十の柱に裝飾を施し、庭に軍樂の勇ましい調子。

博士の今日の姿を今や見ゆると待ち居る中、やがて目覺むる許の花輪を胸に飾つた、わが主賓は、いとも謙讓に席に着かれた。さて

會は余興を以て初まつた大谷新の新講話と銘を打つたのは諧謔に厭世主義を満足主義に移せと云ふのである、笑聲四方に起つて喝采を博した、辰燕の浪花節赤垣源藏袂別は悲壯沈痛滿場の涙を搾らせた。

午后三時半、愈今日の本舞臺。

加藤慶三氏發起人總代として開會の辭、博士の勤績を祝賀し、その功を讀し其徳を稱へ、こゝに門弟子集りて此會を起したる所以、幸に遠近多數の賛同を得此典を舉ぐるに至れる來歴を述べ、次いで卒業生、學生團總代米

村吉太郎氏は頌徳文を朗讀し、茲に紀念品目錄、頌徳表一卷を奉呈した、醫學科第四年伊藤哲一氏は醫學科學生を、藥學科第三年上遠野與作氏は藥學科學生を代表して各祝辭を奉り、櫻井小平太氏賛助會員を代表して校院長としての博士が平生を讀して祝賀の意を致し、次に能登珠洲郡の澤老翁(澤賢吉氏の嚴父)また起つて博士の徳を稱て芳壽萬歳を祈る旨の演説、林篤氏は各地より寄せられた祝詞、祝電を一々代讀される。

最後に高安博士は壇に立ちて曰く、予が在職二十年祝賀會を斯くまで盛大に舉行せられしは欣喜の至りに堪へず謹んで感謝す、予は當初辭退したるも諸氏の熱誠なる準備既に成れるの故を以てす、故に之を受けざるの非禮を省み出席したり、予が任に此地に來りしは明治廿一年三月三十一日にして今日に至るまで在職實に滿二十星霜の長きに及ぶ、然も特に紀すべきの事績なきを耻づ、されどこの長年月間に我が専門學校を出たるの士は數百千ならんとし、官民途を異にするも等しく社會的活動を爲しつゝあり、之れ聊か吾が貢獻と云ふべからん、吾が前途香かなり、予は勇往不退轉の決心を以て飽くまで教職の爲めに盡し、國家と諸氏の希望に應へん、この盛會に加ふるに只今貴重なる紀念品を賜はる予が一生の紀念たるのみならず子孫に傳へ以て奮勵に資すべき絶好紀念

たり、謹んで受く」と常ながら豊なる語調の、わけても美はしき花ばらの音色であつた。

米村氏の朗讀し博士に呈した頌徳文は次に、

賀金澤醫學專門學校長高安先生在職二十年叙

自第四高等學校醫學部創設至今日任教職者不下數十人然雖二十年之久勤勉如一日獨吾高安先生一人已而其功德最顯矣

先生夙卒業東京大學後更攻眼科學明治二十一年任本校教授既而補主事兼金澤病院長三十二年奉官命留學獨逸復研脩眼科學其業益進居二年皈此時分醫學部爲金澤醫學專門學校乃任其校長尋授醫學博士以其耆老人環著也累進高等官二等正五位勳四等先生敎生徒也眞摯懇篤無倦怠色其理校務也周到慎密無有遺漏當病院新築學校分立之際事端紛雜最難措辦而先生處之事皆得宜蓋本校之與病院所以致今日之盛先生之功多焉且夫四方之士受先生之指敎卒業成家爲國家之已超七百人况又至因其治療起癈發矇者殆不可以千百而數也嗚呼先生功德深且大如此宜矣官秩累進令譽日隆也古人曰不爲良相則爲良醫其先生之謂歟、今年三月爲先生在職二十年茲開茶筵獻紀念什器聊致仰景之意云爾

明治四十一年四月十八日

金澤醫學專門學校卒業生團

金澤醫學專門學校生徒團

右は宮川第四高等學校教授の撰に際り、藤井全校書記の書にふれるもの也

祝 辭

本日ナトシテ恩師高安博士ガ在職廿年ノ祝賀式ヲ舉ゲ生等半千ノ學徒ハ精勤篤實ナル博士ト面リ此盛典ニ列スルノ光榮ヲ有スルヲ喜ズ

貳拾ノ星霜ハ短ナリトハセジ熱誠ノ溢ル、所精氣ノ透徹スル極ミ池水氷ル冬ノ日モ甕ノ熔クル夏ノ日モ撓マズ倦マデ陶治啓發セラレシ恩ハ仰ゲハ高キ白山モ蒞メバ深キ北海モイカデカ是ニ比ベジ得ベキ只滿腔ノ赤情ヲ捧ゲテ敬意ヲ表ハシ切ニ我校ノフンダメンターレ、アウトリテートヲ以テ任ジ永ヘニ我校ト始終セラレンコトヲ冀フアルヲ知ルノミ
謹デ在校生一同ヲ代表シテ閣下ノ益高壽ナランコトヲ祈ル

明治四十一年四月十八日

醫學科生徒總代 伊藤 哲 一

朝鮮

第十卷雜誌第五十號

吾ガ敬慕スル

恩師高安博士閣下ハ明治二十一年四月第四高等中學校醫學部開始以來教授又ハ校長ノ職ニアリテ万難ヲ排シ艱苦ニ忍ビ孜々トシテ薰陶ノ勞ヲ執ラル比年校運ハ駸々トシテ止マル所ヲ知ラズ學風ハ振張シ校規ハ齊整シ世人ノ信望亦タ甚ダ大ナリ蓋シ偶然ニアラザルナリ今ヤ閣下ノ在職二十年ノ賀ニ會フ豈欣賀ノ情ニ堪ヘンヤ不肖茲ニ藥學科學生團ヲ代表シ滿腔ノ熱誠ヲ捧ゲテ祝意ヲ表シ併セテ閣下ノ益健康ニシテ眉壽万年ナランコトヲ謹デ祈ル

金澤醫學專門學校藥學科生徒總代

上遠野與作

朝鮮

各地からの祝電、祝辭は

佐野

盛會ヲ祝ス

關東總督府 野口軍醫正

御永職ヲ祝ス

安東縣

宮井 勇

盛典ヲ祝ス

越中中野 藤井助雄

湯目隆積

高安先生ノ健康ヲ祈リ本日ノ盛典ヲ祝ス

武田榮次郎

盛典ヲ祝ス

廣島 松村 魁

高安氏ノ賀會ヲ祝フ

青森 松浦龜太郎

盛典ヲ祝シ謹デ敬意ヲ表ス

能登羽咋 藤井則義

高安先生祝賀會ヲ祝ス

越前三國 高松岩吉

祝賀ス

函館 高松多齊

高安博士ノ紀念會ヲ祝ス

大聖寺町 馬島健吉

祝賀會ヲ祝ス

能登子浦 鈴木秀英

盛會ヲ祝ス

池田秀雄

先生ノ健康ヲ祝ス

福井 千葉 玄也

本日ノ盛典ヲ祝ス

小松 國府 又勝
森田 信雄

本日ノ盛會ヲ祝ス

仙臺 湯目 隆績

謹テ盛會ヲ祝シ先生ノ万歳ヲ祈ル

堀田 圭三

祝典ヲ祝ス

鶴來 辻 一次

盛會ヲ祝ス

越中 佐野 爲明

高安博士ノ御健康ヲ祝ス

富山 加納 景成

謹テ本日ヲ祝ス

富山 奈良 八郎

先生ノ御勤續ヲ賀シ併テ先生ノ万歳ヲ祈ル

黒川 由己

盛典ヲ祝ス

豊橋 渡 孚貞

盛會ヲ祝ス

富山 片山 良作

在職廿年ヲ祝シ併テ健康ヲ祈ル

七尾 林 義輔

廿年間一日ノ如ク母校ノ爲ニ盡サル、高德ナル博士ノ益御健康ナランコトヲ祈ル

澤 賢吉

高安博士在職廿年ヲ祝ス

金子 太須計

盛典ヲ祝ス

島田 吉三郎

岡島 敬治

廿年來ノ教訓ヲ謝シ本日ノ盛典ヲ祝ス

北野 恒夫

博士ノ在職廿年ヲ祝ス

吉川新八

盛會ヲ祝シ尙恩師ノ万歳ヲ祈ル

中島喜作

盛會ヲ祝シ博士ノ万歳ヲ祈ル

在東京 四十年卒業生

謹テ御盛會ヲ祝ス

七尾 鴨脚光榮
七五三龜吉

高安博士ノ光榮ヲ祝ス

大阪金子治郎

盛會ヲ祝シ君ノ健在ヲ祈ル

大阪木村孝藏

二十年式ヲ祝ス

山形吉池省吾

恭シク盛會ヲ祝ス

高岡河村郡太郎

高安博士在職二十年祝賀會ノ美學ヲ賛シ遙ニ同博士万歳ヲ三稱ス

金澤醫學專門學校三十九年度卒業

埼玉縣 宮川 薫

拜啓愈來る十八日は濟々堂に於て高安博士二十年祝賀會、開會この御事發起人諸士の御多忙嘸かしと存ざられ候降て小生事御手傳に參上致すへきの處何分にもその意を得ず參上致し兼候間此段惡しからず御容免下され度終りに臨み諸氏の健康を祝し當時の盛大大からん事を奉祈候

静岡縣小笠郡平田村 吉村 一馬

謹而先生之二十年御在職祝賀會を遙賀奉候

東京 宇野 正

謹啓櫻花爛熳たる候に當り先生の御在職二十年祝賀會を賀し遙かに愚書を以て御祝詞を呈し併て先生の益御健康を奉祈候

七尾 大櫛 秀松

祝 辞

維時明治四十一年四月十八日ノ佳辰ヲトシテ

正五位勳四等醫學博士高安恩師ノ在職貳拾年ノ祝賀會ヲ開ク善ヒ哉學ヤ、回顧スレバ明治二十二年先生ノ始メ石川縣々立金澤醫學學校ニ職ヲ奉ジテヨリ今日ニ至ルマテ第四高等中學校醫學部主事及第四高等學校醫學部主事金澤醫學專門學校長ニ歴任シ其間二十年ノ久シキ一日ノ如ク孜々トシテ倦マズ名聲四方ニ喧傳シ患者其門ニ囀集シ失明ノ厄ヲ免ガル、モノ其數幾十萬、弟子ヲ養成スルコト幾千人ノ功亦大ナリト云フ可シ、宜ナル哉去ル明治二十四年位階ヲ拜受シ次テ明治三十二年文部省ヨリ撰

拔セラレテ獨逸國ニ留學ヲ命ゼラレ居ルコト二年歸朝ノ后醫學博士ノ學位
ヲ授ケラル其名譽亦大ナリト云フ可シ先生ノ性溫厚篤實ニシテ一度モ其
溫容ニ接セバ赤子ノ慈母ヲ慕フガ如シ其德亦大ナリト云フ可シ、余モ亦
先生ノ薰陶ヲ受シモノ今ヤ在テ此ノ盛筵ニ列セント欲スレト山河遠ヲ隔
ツルヲ以テ意ノ如クナラズ依テ聊カ蕪辭ヲ呈シテ祝意ヲ表ス「想フニ今
日高樓ノ上數多ノ紳士及平素先生ノ養成セラレシ弟子坐ニ滿チ美酒佳肴
前ニ陳リ花ヲ結ブノ仙女其間ニ徘徊シ絃歌湧キ詩聲談笑堂ニ溢レン余此
盛筵ニ列シテ一大白ヲ舉ゲ先生ニ饋飲セシメサルハ千載ノ遺憾ナリ

在鳥取縣伯洲未城

弟子 吉田和三郎

嚴肅な幕が落つると再び辰燕の神崎與五郎堪忍袋、次
は山室氏テナー、石川氏バイオリンと云ふハイカラもの
藝題の義は六段とあつて、獨斷ではあるが上手であつた
やうだ、御次は日本趣味のさつまびわ、武藏野の一段は
安在氏でアンガイにうまくないとの評判、衣川氏の太田
道灌は花があつて實がない山吹の如く、御大將平豊彦氏
の吉野落二段は流石に巧妙にて御運拙なき宮の御行末に
洋服の袖を濡ぼした。
ろれから博士寄贈の強飯の折を配つて腹を拵らへ、赤提
灯を一本づゝ貰つて校前に整列し今や提灯行列の壯舉が
演せられやうとするの記事は次に。

祝賀提灯行列記

高安先生在職二十年 (調 勇敢ナル水兵)
祝賀提灯行列の歌

一、

仰けは長き師の慈悲、俯しては遠き師の垂教、
静息む隙なき星霜の、早や二十年の循環日ろ。

二、

観よ爛熳の花の色、聽け清閑の鳥の聲、
我が師の君のいや尊き、名譽をたへ祝ふ也。

三、

(此章提灯を上げ調子を合せる)
愛兒吾等の翳したる、赤さ灯のこの光彩、
我が師の君の永劫に、前途の幸を祈る也。

四、

比稀なる今日のひを、祝へやうたへ諸共に、
履むへき道の絶るまで、聲の續かん限り迄。

(徳久翠流子作)

天地は萬物の旅籠屋にして、光陰は百代の御客様なら
ば、浮生は一夜の夢にも若かざるべし、懼をなす時短け

れば、何ぞ燭を乗つて夜遊せざると、春夜だけに道理の縁をつけて、赤丸提灯を肩に擔ひぬ。

豆腐屋の呼び聲に、永き春日の悠然とくれて、巷の柳打ち煙り、蝙蝠ひらくと飛びて、油うる手許暗らく、營所の喇叭肅々と、花も暮靄の裡に隠れ、行人絡驛、野山がへりの人も交りて、暖き風頬を撫つる心地好さ、瓢の酒は吾になけれど、餘興に酔ひて小豆色せる吾が友よ、十八日午後七時大手町に整列して、幾百千の紅燈が、颯々として六百米突の長距離に連りし時、博士の祝賀に捧ぐる燈火の吾が手にあるの幸を喜びたりき。

長蛇の列は四年を先導として動き初めたり、祝歌自ら口を出て、軍隊的の武步整然、能く樂調と合して、市人堵の如き尾張町より、翠柳紅球の十間町を過ぎ、折れて南町石浦町の一等街を歌ふて通れば、香林坊の群集は十重二十重に打ち圍みて、辛うじて行列を通ずる許り、大分景氣がよき故に行列も張り合があり廣坂を登る壯觀は大龍天に沖すとや言はまし、知らぬ間に小立野を経て病院に向へば、電燈花の如く階上を照して參差たる人影吾等を迎ふるかど嬉しく、行列は博士邸前に停り歡呼少時は止まざりしが、忽ちにして紅燈亂れて潮の如く門内に入るや、肩々相摩し、踵趾相接し、六百の燈花渾然として正に一塊の紅團となり、照す所の十方皆赤く燭は空を

焦しやせむ、時に博士は高く立ちて、吾等が勞を謝し歡喜の情を述べ給ふに、吾等さへ斯く樂しくも嬉しさものを、今宵博士の身羨ましや、師弟の誼古今人相若かずと言へど、ろは吾等を知らざる故なり、靜肅は一撃の太鼓によりて醒されつ、君が代の奏樂は曉らかに數百の聲を合せ、星の國さして昇り行く如し、樂終り三唱の萬歳は全部を震はせて散るや紅葉の散りくくに、家路へ急ぐ道すがらを、空の色次第に褪すると東を見れば、面白や春月笑みて金盤の如きが、病院の棟を越えて、盡きたる紅燈の光に代はれり。

(……………雨橋傘人……………)

○在東京四十年卒業生

懇親會記

(高野仁風氏發藤井一雄氏宛)

蜘蛛の子が散つたやうに四分五散した百數十の新得業士の中、期せずして帝都の學堂に集まつた、去年までは兼六の櫻花を賞せし身の、今茲上野向島に變らぬ花の色を詠めた二十餘名が。

過去半歳の間染込んだ浮世の汚を赤裸々な君僕失敬の昔に返つて、一つ流し落さうぢやないとは、避ふ度に言ひ合つた同人間の輿論であつた。

幸ひ四月十八日は恩師高安博士就職滿二十年の祝賀會當日、遙賀會を兼ねて懇親會を開いて見やうとの發議が起り何時もながら世話焼の貧乏鬮を引いたのは額、白井の両君に僕。

大學病院は時計臺の前、豊國樓で午後三時を期して集まつた面々は。

西村、額、渡邊、白井、加藤、岡田、津田、黒田、高野。

モーニングに背廣、山高に中折、いつ蓄へたか密髯疎髯、昨日の角帽姿は名残をも留めぬ。

いや久濶、其の後は御無沙汰との挨拶も夏向きに蒸暑い言葉は禁物と打ち消され、大學病院介補の不平やら、出京以後の御經歷やら、話頭はいつしか現在から過去に退却して角帽時代の事で打ち切り時々大笑を雜へて渠れ一言我れ一話、いつ果つ可しとも見へぬ。

酒が出る、肉が焼かれる、かしこにはプロジェクトと連呼して憂然コップを打ち合ふ者、こゝには便々たる腹を鼓して尙ほ大肉片を頬張る者、シャンペンを呼ぶ者、サイダーを喚ぶ者、同じ樂しさに溢れた波は絶へず九人の頭に平等に流れて今更ながら「友」の趣味を痛切に刻み込む。

誰云ふとなく金澤醫學專門學校万歳、高安博士万歳、

(會報)

四十年卒業生万歳の聲が一齊に迸つたが、知らず吾等が共通の第二の故郷、金澤の天地に響いただらうか。

當日高安博士在職二十年祝賀會に發した祝電は

盛會を祝し博士の万歳を祈る

在東京四十年卒業生

而して目下在京の同窓は次の如くである、

- 西村銀太郎(青山内科) 津田博明(小兒科) 額又太郎(佐藤外科)
- 邊關重(佐藤外科) 橋本正次(近藤外科) 白井濟(整形外科) 笹岡芳名(皮膚花柳病) 諸橋林太郎(婦人科) 加藤敏作(耳鼻咽喉科) 岡田秀造(耳鼻咽喉科) 高野宗重(耳鼻咽喉科) 以上大學病院 黒田道純(長興病院) 遠山正輝(田代病院) 松本常次(多納病院) 小野醇吉(海軍々醫學校) 宇野正(眼科講習) 伴鐸也(不明) 稻崎重助(永樂病院) 三田村直(樂山堂病院) 田邊俊三(長興病院)

○講話部記事

(雜誌部委員 よし生)

▲第四十一例會

大空迷濛、白山脈一帯に抵觸したる密雲いやが上にも重疊し、朝鮮海渡來の暴風、旋風と相混じて雪を飛ばし、霰、雹を散ずるの光景、天候險惡を以て名たるこゝ北國に於てすら稀に見るの時、十二月二十二日夜七時より、わが講話部例會は病理教室講堂に開かれたり

天候しかく慘なるに加へて、恰かも冬期休暇に接せるを以て温き新年を故山に迎ふべく既に旅窓に就ける會員尠からざりし爲め出席者甚だ少く漸く百に満たざりきやがて上田部長の開會の辭ありて後、藥二毛戸四郎、醫二村上盛峯、醫三米永勇作、醫四伊藤哲一、加藤健之助の諸氏は相次で立ち、獨又は英語にて或は物語、或は人生感を語り又は米國醫學の現況を紹介し、瞽性糖尿病の病理を論述せられ、醫四廣瀬淵龍、醫三永井敬孝の兩氏また所感を披瀝さる、次で小原講師、上田教授は外國語學修に就き學生諸君に希望を陳じ、山崎教授は流暢なる獨逸語もて外國語修養上の注意を與へ、獨語學修者の缺点を指摘し、上達の要訣を示教せらるゝ頗る懇切を極む之に次て

秋山醫員、は男性半陰陽の一例に就き述べらる、該例は小川婦人科「クリニック」にての經驗に係はり、十八才の女性なるが、久しき前よりの左外鼠蹊「ヘルニヤ」の治を乞ひ來れるに會し手術の結果、そが内容は睪丸にして、鏡檢上、明かに未だ成熟に達せざる睪丸組織なるを証明し、更に精檢するに外陰部、体格、性格、働作等全く女性に相應するも、子宮は欠如せり、之により男性假性半陰陽と考察したりとて、半陰陽の類別、日本に於ける報告例に亘り詳述し、猶「ヘルニヤ」内容の肉眼的及鏡

的標本を示されたり
福岡講師 赤痢に合併せる出血性紫斑病の三例なる演題にて初め紫斑病の一般につき略叙し、講師が金澤市立櫻木病院に於て經驗したる三實例を詳述せらる、猶、該講演の原稿は次號、原著及實驗欄に掲載すべし
十時半、上田部長の開會の辭ありて解散を告ぐ、鬪を排すれば怒風急霰益々烈しく、地上既に半尺餘の糠雪を敷きぬ

▲第四十二例會

三月二十八日(土曜)午後二時より本校濟々堂にて開催、
▲開會の辭 上田部長

開會の挨拶、來る五月廿三日開催豫定の講話大會に就ての希望、など

▲所 感

通常會員 片岡正雄君

初め「演說練習の必要」を説きて自己の經驗を披瀝し、次で「羅馬字ひろめ」に就て、外國語修得の必要、漢字の不便なる、言文一致躰はつとに一般より認め居らるゝ所、更に羅馬字を用ゐたるの便宜、之に關する反駁論等に亘りて論述せらる、

▲三人の情者(獨逸語)

通常會員 毛戸四郎君

三人の王子が父王より世を譲らるゝとき、互に惰者競べをなすの對話。其態度、語調と云ひ、恰好なる君はとてもメールヘンの獨占者なりかし

▲信飛の高地

通常會員

酒井碩治君

信飛の高地に就て歴史上、地理上よりの觀察より昨夏踏破せし越中一飛驒一信濃の旅行中に於ける所感を述べらる、高地、僻村の生活、交通と生活上の觀察、山岳起伏の状など着眼頗る奇抜、

▲内直筋營爲不全症に上斜筋及び三叉神經

全枝麻痺を伴ひたる一例

特別會員

石坂醫員

初め眼筋神經麻痺の頻疎に就きて諸家の統計を掲げ、文献上自己經驗の症例は未だ之を見出し能はざる興味多き一例なることより、轉じて眼筋麻痺一般の症候、其診斷法の概畧を陳述し次で實例に説き入らる、該例は五十歳男子にして頭部外傷後起れるものなりと云ふ、詳細は乞ふて後號に掲載せん、

▲目覺時計

高安教授

滑稽に、しかも眞日に比喻を目覺時計にとりて學生を醒覺せらるゝ詢々、將に眠らんとするもの、熟睡の輩、豈「ウエツケル」の喧譟をまたずして大に奮發する所なかるべけんや

▲直接遺傳

金子教授

直接遺傳の一方面を解説せらる、原稿は次號『原著及實驗』欄に掲載の筈、

▲浴中聽診の診斷的價値

特別會員

岡本京太郎君

君は病兒を熱浴中に於て聽診する方法を創意し、之による診斷的價値を細論せらる、演說筆記は次號『雜纂』欄によりて紹介せん

▲討論

上田教授

岡本氏の方法に全然同意を表し、教授が從來の經驗によれば、治療上に熱浴を應用し殊に腸室扶斯には好成績を呈せるが、猶最近實驗の實布帝里小兒、腸室扶斯重症者に於ける狀況を述べられたり、

▲痙攣性脊髓麻痺患者供覽

特別會員

今村醫員

先づ本症の一般に就て略述し、次で氏が山崎内科に於て經驗の一患者に就き供覽せらる、患者は廿八歳男にして約五年前より本病の徵候を來し目下両下肢に於ける特異徵、両上肢は屈曲に對して少しく抗抵あること、ろの臑反射亢進の外、發語障害、顔貌の變狀等あり、氏は該患者の本病は原發性なるものなるべしと論決せられたり、

▲閉會の辭

上田部長

期恰かも春期休暇に近く、旅行に、歸省に已に多くを散逸したるの時なりしも、猶通常會員二百に達し、特別會員また多數の出席ありて可成りの盛況を呈し、閉會せしは午後六時なりき、

○第四高等學校端艇

競漕會撰手出場

四月廿六日第四高等學校北辰會端艇部は第十二回水上運動會を大野川に於て舉行し本校撰手また例年の如く招待の班に預れるを以て三艇撰手を編成して出場せしめたり四年、三年級合併(赤) 二年、一年級合併(白) 藥學一、二、三合併(青) とせり、白組は新進の若武者共とて目差すは赤々本年破らずんば堅子をして四ヶ年間全勝の榮譽を擅にせしむるなれと整調磯具、五番山崎、四番近藤、三番古山、二番今井、舳手武者、の面々は舵手絹川と共に作戦計畫に餘念なかりき又青(藥學組)之亦例年に比して漕手一般に優勢となり整調三野、五番矢野、を初めとし目差敵は四年の組々全勝の月桂冠を載かしむれば吾等何の面目かあらん會稽の耻を雪ぐは此時なりと劇烈な練習を積みしや頼母しき、四年(赤)は年々の優勝にて世間の手前、大人氣もなければ本年は新撰手を編成して此に

當らしめ、以て后進撰手の花とせんと専ら學科のつとめに余念なかりき、然るに白組の勇士は雄飛なるメンバーと自信し挑戦を試み背を見するは卑怯なりと呼はりければ赤組は間近に卒業試問の難關をひかへ后には(白)(青)二組の挑戦あるあり未だ嘗て敵に背を見せし例なき手腕もて輕く小敵を水路に破り進で難關に迫らんと出馬せし赤組撰手は左の如し

舵手 宮村誠一郎 整詞 吉川 友信
 五番 金子 義長 四番 赤祖父 廉三
 三番 中川 善松 二番 宮城 篤珍
 舳手 高儀 京治

時移り順進みやがて細雨を犯して出發点に達す(白)組は第一航路をとる此時恰かも北風強かりしかど白組は五郎島影に陣せるを以て風の妨げなく作戦圖に當れりと胸中已に勝算を決し雀躍を極む(青)第二航路にして急流に乗じ地利尤も良なり(赤)第三航路なり水淺くして流遅く且つ北風強く吹きしきり艇体動搖殊に甚し當日の競漕十數回中此第三航路にて勝ちし事なき不利なる地なれば舵手の操縦意の如くならず二番の改漕數回暫く艇首を正くせり
 出發の令傳るや(白)磯具の「スタート、ヘビー」と風を受けざるにより絹川舵手は已に「カーレント」に乗じ進む

事一艇身、(青)三野の「チール」良かりしも五番の「チール」深かりし爲め艇動搖して急流より乍ら(白)組に后る(赤)組吉川の「スタート、ヘビー」は強漕金子と相俟て有勢なりしも水浅く流なし三十本を入れる、や漸く小流に乗る「セコンドブイ」前に於て青を抜く事已に一艇身なり更に十五本の「ヘビー」と舵手の「コース」に能く乗せしとに由り三百米突に於て白を抜く事一艇身となる青組は赤に先を制せられしにより五六本にて五番「チール」尖端破損し爲に中止「ロング」に移りしは氣の毒なりき白組また三十四本の調子にて能く漕ぎしも赤組五番、四番、三番の猛烈なる漕法と三十六本「ピッチ」は整然乱れず二番、一番の新進の士亦能く努め白組を抜く事益遙かにして加ふるに最後の「ヘビー」能く効を奏し三艇身半の先進にて勝利の月桂冠は赤組の手に歸しぬ (競漕時間三分四十秒)

左に四年間全勝の漕手を記して我校運動界の花とせん

整調 吉川友信 五番 金子義長 三番 中川善松

○母校雜件

▲諸教授の出張、

高安教授 は四月一、二日福岡醫科大學内に開催の日本眼科學會總會へ出席の爲め三月廿九日出發、四月

十日歸校せられたり

山崎、佐々木の兩教授 は三月末東上、日本内科學會、消化器病學會總會及其他に出席せられ、四月六、七日頃歸校

村上教授 學術上取調への爲め京都及岡山に出張を命ぜられ三月廿七日出發、四月十一日歸校せらる

▲鈴木海軍々醫中監の來校

海軍々令部附の全氏は本校に於ける海軍々醫志願者の實況視察の爲め三月廿五日來校、諸般の取調を了せられたるが、猶、氏は校長の乞により一場の講話を演ぜらる、全日午後、學生全部濟々堂に集合の上先づ帝國海軍の現状より軍醫の職務、軍艦生活と陸上勤務、軍醫の待遇、出身の手續等に亘り詳密に縷述せられぬ

▲横手、石津兩氏の來校

石川、富山、福井三縣下の工場衛生に關し調査の爲め内務省より出張を命ぜられたる東京醫科大學助教授醫學博士横手千代之助、衛生試験所技師石津利作の兩氏は數日間金澤に滞在、各種工場に就き視察を遂げられたるが、三月廿五日本校へも立寄られたり

▲高柳書記の休職

本校書記(庶務課主任)高柳謙次郎氏は温厚寡言にして職務に忠實なりしが、三月三十一日、文官分限令第十

一條第一項第四號により休職を命ぜられたり

▲陸軍省依託の藥學科學生

四月一日附にて藥學科第三年生 高橋耕作 同第二

年生 田中儀一 同 荒井國三郎の三氏は陸軍衛生

部依託生徒となりたり

○本誌第五十號と索引附録

我十全會は明治二十七年十月の創立に係はり、越へて二十九年十一月二十五日を以て本誌第一號發刊の舉あり、爾來年を閱する十三年、茲に第五十號を迎ふるの機運に際す、而して初號當時は微々たる一雜誌に過ぎざりしも、會員諸賢の熱誠と先輩委員諸氏の盡瘁とにより逐號体裁整頓に向ひ、内容また豊富、優に斯界に重きを致すに至り、目下の發兌部數千三百に上るの盛況に達せり、然りと雖今後發展の道程遠遠なる所、余輩微力と雖も任をこゝに負ふの故を以て奮勵、事に當らんことを期す
本誌原著及實驗欄所載の著述は既に其幾分を「日本醫事雜誌索引」に掲載せられ、猶同索引の上梓に従ひ逐次包拵せらるべきを以て、更にこゝに索引を編するの要益尠なしと雖、凡そ一雜誌の或る期限に於て其索引を附するは當然の事に屬せり、之を以て、本誌また第壹號より第

五十號に至れる索引を編し、本誌の附録として會員諸君の座右にすくむることとなせり

* * * * *

會告

○寄贈及交換書目

(六月十六日迄領取ノ分)

醫海時報	七〇二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、 一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、 二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、 三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、 四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、 五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、 六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、 七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、 八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、 九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇、	同
日本醫事週報	二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、 一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、 二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、 三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、 四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、 五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、 六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、 七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、 八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、 九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇、	同
國家醫學會雜誌	二四九五〇、二四九二、	同
中外醫事新報	六六八九七〇、二二三、四五六、七	同
治療新報	七〇二、三、四、五、	同
藥學雜誌	三二二、三三四、五、	同
鹿島衛生醫事月報	一〇九、二〇二、三、	同
助産之榮	一四〇、二二三、四、	同
藥石新報	六三三、三四五、六七八、九四〇、二二三、三四五、	同
東京醫事新誌	一五四七八、九、五〇二、三三四、五、六、 七八八九〇、一、二、三、四、五、六、	同
大日本私立衛生會雜誌	二九六、七八九、三〇〇、	同
衛生談話	七、一〇八年ノ二、三、四、	同

東京醫學會雜誌	二三ノ二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、	同	學友會雜誌	六	富山縣立魚津中學校
醫事新聞	七五〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九、	同	神經學雜誌	六ノ一、二、三、七ノ一、二、三、	全日本神經學會
醫談	一〇四、五、六、七、一八九、	同	眼科臨床醫報	二六、七八、九、	北越眼科研究所
治療藥報	三二、三、五、六、	同	日本助産婦新報	二〇〇、一、二、三、	同
醫學中央雜誌	五九、六〇、一、二、三、	同	靜岡縣醫學會々報	二〇、	同
日本消化機病學會雜誌	六ノ五、六、七、一、	同	躬行會叢誌	三七、八、	同
日本婦人科學會雜誌	二ノ三、三ノ一、	同	會報	六、	同
藝備醫事	一四〇、一、二、三、四、	同	校友會雜誌	二、	同
臨床藥石新報	三三、三四、五、六、	同	學友會雜誌	八、	同
中央醫學會雜誌	七、九、	同	福岡醫科大學雜誌	一ノ三、	同
岡山醫學會雜誌	三六、七八、九、一〇、	同	校友會雜誌	四、	同
鎮西醫報	一〇九、一〇、一、二、	同	道修藥報	六八、一〇、一、	同
產科婦雜誌	九、九、一〇、一、二、	同	大日本耳鼻喉科會々報	二四ノ二、三、	同
研瑤會雜誌	八、三、四、	同	北越醫學會々報	一、三、四、	同
順天堂醫事研究會雜誌	四二、三、四、五、	同	校友會雜誌	九、	同
成醫會月報	三二、三、四、五、	同	大阪醫學會雜誌	七ノ三、四、五、	同
同仁	二、	同	東北醫學會々報	四、七、八、	同
日本眼科學會雜誌	二ノ一、二、三、四、五、	同	耳鼻咽喉科京都臨床	一、	同
軍醫學會雜誌	一六七、八九、七〇、	同	皮膚科及泌尿器科雜誌	八ノ一、	同
臺灣醫學會雜誌	六三、四、五、六、	同	北海醫報	八ノ一、	同
臨休彙講	一九、二〇、一、二、三、	同	好生館醫事研究會雜誌	一五ノ二、三、	同
京都醫學雜誌	五ノ一、二、	同			

(會告)

- 明治藥林 一ノ四
- 校友會雜誌 二ノ八
- 校友會雜誌 七
- 校友會雜誌 四
- 軍醫學會雜誌 一六九
- 校友會雜誌 二三
- 同窓會雜誌 三三
- 校友會雜誌 四三
- 莊內醫學會々報 六四
- 北辰會雜誌 五
- 實人體寄生蟲病編 一部一冊

○自明治四十一年一月廿三日校外十全會費納付調書

- 金額 期限
- 金貳圓 (自三十九年度 二ヶ年分)
- 金貳圓 (自四十年年度 二ヶ年分)
- 金貳圓 (自四十一年度 二ヶ年分)
- 金參圓 (自四十二年度 五ヶ年分)
- 金參圓 (自四十三年度 五ヶ年分)
- 金參圓 (自三十九年度 三ヶ年分)
- 金壹圓 (四十年度分)
- 金參圓 (自三十八年度 三ヶ年分)
- 金參圓 (自四十年年度 五ヶ年分)

- 明治藥學校 滋賀縣立第一中學校
- 石川縣立第二中學校
- 東京開城中學校
- 陸軍々醫學會
- 石川縣立第一中學校
- 愛知縣立醫學專門學校
- 千葉醫學專門學校
- 同 第四高等學校
- 小西俊三君

- 氏名
- 月原秀範君
- 橋本喜久三君
- 上田茂君
- 吉江糸太郎君
- 田代保二君
- 藤井助雄君
- 太田他計作君

- 金四圓 (自四十五年度 六ヶ年分)
- 金貳圓 (自三十七年度 二ヶ年分)
- 金參圓 (自三十八年度 三ヶ年分)
- 金參圓 (自四十年年度 五ヶ年分)
- 金參圓 (自四十四年度 五ヶ年分)
- 金參圓 (全)
- 金壹圓 (三十七年度分)
- 金四圓 (自四十五年度 六ヶ年分)
- 金參圓 (自四十四年度 五ヶ年分)
- 金參圓 (自四十二年度 三ヶ年分)
- 金參圓 (自三十九年度 三ヶ年分)
- 金四圓 (自三十九年度 六ヶ年分)
- 金參圓 (自四十四年度 五ヶ年分)
- 金壹圓 (三十九年度分)
- 金參圓 (自四十四年度 五ヶ年分)
- 金參圓 (自四十四年度 三ヶ年分)
- 金參圓 (全)

- 江藤潤一君
- 鹽井竹次郎君
- 石黒均造君
- 上原秀三君
- 中島誠君
- 眞柄佐一郎君
- 早瀬三求君
- 後藤義賢君
- 鳥田義一君
- 酒井政吉君
- 河合鷹君
- 菊池文岱君
- 木下克雄君
- 岡田虎介君
- 森田信雄君
- 上遠野與作君
- 萩野茂次郎君
- 鷹津冬藏君
- 伊藤春馬君
- 小田善壽君
- 高木安治君